
とある男の贖罪の記録

カガヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある男の贖罪の記録

【Nコード】

N8257Q

【作者名】

カガヤ

【あらすじ】

とある男がいた。

男はあらゆる世界を廻っていた。

ある時は、異世界の敵を倒す為。

ある時は、新たな道を作る為。

またある時は、別の目的の為。

その為に男は様々な力を身に付けた…いや、身に付けさせられた。

その力と使命だけがその男の唯一の”存在意義”

全てを失って身に付けさせられた力をもって、世界を救う為だけに存在する男。

その男が次に行く世界で何を行い、何を得て、何を失うのだろうか…
しかし、その男にとって全ては”贖罪” 永遠に許されない罪滅ぼしの旅。

※現在仮面ライダー編。

注意事項

この作品は以下の注意事項があります。

○主人公は最強クラスのチートです。ですがただのチートではありません。

○主人公はいくつもの作品世界を廻り、その世界の技や魔法を取得します。

○様々な作品が登場しますが基本的に作品の枠を越えてクロスオーバーする事はありません。

○例外的にシリーズものの作品はクロスオーバーする事があります。
（クロスオーバーする例）仮面ライダーシリーズ、ウルトラマンシリーズなど

○技や魔法名だけ出て、その作品世界が登場する事がない場合もあります。

・主人公はプロログ時点でFate、月姫、メルブラ、NARUTOの技が制限なしで全て使えます。

○オリジナル武器やオリジナル技、魔法、能力が出てきます。

○主人公設定は随時更新しますが、主人公の過去は物語の後半で明らかにします。

○原作ブレイク、一部ご都合主義が基本ですのでご了承ください。

話としての登場予定作品

・東方、真恋姫、マブラヴオルタ、とある魔術&とある科学シリーズ、涼宮ハルヒシリーズ、ガンダム00、ガンダムSEED、SEED DESTINY、平成仮面ライダーシリーズ、ウルトラマンシリーズ、地獄先生ぬ〜べ〜

作者の気分で増えるかも？

・技や魔法名、武器や機体や設定のみ登場予定作品

・ドラクエシリーズ、FFX、型月、NARUTO、ONE PIECE、上記以外のガンダムシリーズ、その他スパロボ参戦作品…

これも作者の…(ry

主人公設定（前書き）

話が進む度に随時更新します。

主人公設定

◎名前

カイン

・ただし、世界を廻る度に適当に付けた名前を名乗っている。
真名はあるが、封印中。

◎通称（自称）

人の皮を被った化け物。

◎年齢

数百歳（プロローグ時点）

◎外見

様々、能力や魔法で性別や外見年齢などを自由に出来る。
通常は黒目黒髪の一般的な男性の姿をしている。
ただし、その世界に合わせた基準の整った顔立ちに自動的になる。

◎性格

一匹狼的なオーラを放ち、仲間などを寄せ付けない雰囲気醸し出して他人を拒絶しがち

だが、他人を放ってはおけずに直接間接的に手助けをすることがある。

役目を果たす為には人懐っこい性格などにも変わる。
素がどんな性格かは誰も掴めない。

◎身体能力

無限に成長する肉体を持っているので修行すればするほど強化・進化される。

プロログ時点では万華鏡車輪眼・直死の魔眼などをリスクなしで使用可能。

ただし、それ相応の修行をしなければならない。

無限の剣製をランクダウンなしで使えるようになる為に50年以上費やした、など。

格闘術、剣術、槍術、重火器、MSの操縦などはベテランクラスの腕前。

◎特殊能力

『情報操作』…

自身の能力をその世界に合わせて予め設定出来る。

インストール・その世界に存在する技、魔法、術、知識を吸収する。
ロード・他世界の能力や技を使用するコマンド。

クリエイト・世界の知識を組み合わせ新たな武器や道具やロボなどを作り出す。

『概念無効化』…

全身イマジンブレイカー、ただし物理的な攻撃や魔法には効果なし。

例）ザキやラリホーは無効化できるが、メラやまじんきりは無効化出来ない。

『無老無死』…

『老いず、死なず』ではなく『老いも死も無い』

死ぬほどの攻撃を受けても瞬時に再生、直死の魔眼やザキなどは一切効果が無い。

『無限力』

魔力、霊力、妖力の3つの力を使いこなす、無限だが一気に使用するとしばらく回復に時間がかかる。

『三重分身』

魔力、霊力、妖力を主に使う3人に分身出来る

◎弱点

・信仰を受けなく神力が使えない為、世界ごとの神の力は取得できない。

・世界ごとに能力にリミッターがかかる。

例）魔法の概念が存在しない世界では他世界の魔法は一切使えないなど

・リミッターはその世界に応じて様々変わる。

・とある形態にならなければ自身の力を100%使えない。

・召喚術、式神、契約系の術や魔法は一切使用出来ない。

・高レベルの能力は1つの世界につき1回しか使えない（直死の魔眼、写輪眼など）

◎使用武器

無限の剣製で武器には困らないが、専用の武器が欲しいと思い、ワンピースの世界で手に入れたのが

黒天…最上大業物の1つ、黒刀。

白光…最上大業物の1つ、黒刀と対をなす、白刀。裏も表も真つ白な刀。

これを自分の魔力や霊力を籠めて鍛え直し、自分だけの刀とした。他にも専用の槍などを作る予定。

◎その他

過去は一切不明。様々な世界を廻り、自分の使命を果たすと次の世界へと廻る。

次の世界の行き先と使命は自然に頭に浮かぶ、世界間は方舟『ムゲンアーク』で移動する。

自身を人間扱いせず、他者の為に何でもしようとする。

人との繋がりを拒絶するが、絆の力を理解し、どこかでそれを求める『究極の矛盾をもつもの』

◆覚醒態◆

カインが仮の姿を捨て、全ての力を解放した姿。

この姿になれるのは世界ごとに1回のみで、最後の切り札。

世界の常識を根本から破壊する姿なのであまり長時間はこの姿でいられない。

ただし、世界によってはこの制限がなく、何度でもなれる世界があ

る。

◆方舟『ムゲンアーク』◆

カインが『世界』を廻るための舟。

『世界』という島々を渡り歩く帆船のイメージ。

武装は基本的にはなく、世界に出現する事もないが、ガンダム世界などで戦艦として出現した事はある。

動力、その他は一切不明。

外見以上に内部は広いスペースがあり、物品庫や資料室、武器庫、トレーニングルーム、個室など

標準的な宇宙戦艦の装備は一通りある。

カインが『世界』にいる時は、カイン自身の人格をコピーした高性能A I『ゼオン』が操縦などを行う。

アーク内にある無限倉庫には今まで渡り歩いてきた『世界』に存在した主力機体

マジンカイザー、真・ゲッター、ガンダム（各作品の主力機）などが保存されている。

また、機体を元にオリジナルのガンダムなどを製造する事も可能。ただし、機体が使える『世界』は限られている為、あまり出番がない。

以下、話が進むごとにカインも知らない真実が増えていく…

主人公設定（後書き）

チートに見えて色々制限あります…さらに、過酷な制限も…

プロローグ（前書き）

ついに始めちゃいました、新作！
リリカル異伝よりは更新遅いと思いますが長い眼で見守ってください。

プロローグ

プロローグ

???

「ちっくしょう……なんで、なんでなんだ！」

男の呟きが誰もいない部屋に木霊する。

「ああ、そうか…やっぱり」

「俺は、死ななきゃいけなかったんだな…」

そして、その男は世界から消えた。

・
・
・

ワンピースの世界 とある島

「ゴムゴムのおう…JETガトリング!!」

目に見えない程の速度で放たれた拳の乱打が死人の大群を吹き飛ばす。

「火拳！」

極大の炎の拳が死人の群れを焼き尽くす。

「派手にやってるじゃねえか、小僧共が…」

白いヒゲを蓄えた大海賊白ひげは満足そうに笑い、眼の前のかつての宿敵^{とも}を見据える。

「さーて、俺達もそろそろ決着つけようじゃねえか、なあ、ロジャ
ー」

目の前の宿敵は光のない眼を白ひげに向け、自我がないにも関わらず、生前のようにニヤリと笑った。

そして、その場から少し離れた場所では化け物同士の戦いが繰り広げられていた。

「はあ…はあ…なぜだ、なぜ俺の力が通用しない？」

否、戦いではなく一方的な虐殺とも言うべきものだった。

1人は全身から血が吹き出ている、うちはマダラ。

黒地に赤雲の模様が描かれた外套はボロボロとなり、3つの穴が空いていた仮面は砕けている。

「俺はお前を倒す化け物、そう言ったはずだ」

かたや、両手足に鎖を巻きつけ、2対の日本刀を構えた男が闇より黒い眼でマダラを見据えていた。

その身は傷どころか、来ている黒い服には埃すらついていない。

「…イザナギも月読も効かないばかりか、俺に攻撃を当てるとは…」

「…俺がこの姿になる前に、どうにかするんだったな…」

ロード“直死の魔眼”

男の眼が蒼く輝く、それは見る者全てに死を感じさせる蒼さ。
マダラも例外になく、自身の死が明確に脳内に焼き付けられた感覚を覚えた。

「ばか、な…俺が、死だと？」

「死は誰にもでも平等だ、消滅、消失…言い方は変われどな…お前はもう、終わりだ！」

マダラが動くよりも速く、光よりも速いのではと思う暇もなく。
白刃と黒刃、2対の刃がマダラの死の線を切り刻み

「教えてやる、これが…殺すって事だ！」

死の点を貫いた。
かくして、化け物同士の勝負は付いた、尤も最初から勝負と言えるものではなかったが。

「あっちも、勝負が付いたようだな」

男が見る先では麦わら海賊団と赤髪海賊団、そして、白ひげ海賊団が勝利の雄叫びをあげていた。
男はそれを見て僅かに微笑み、また無表情になり眼をつぶった。

「インストール、開始…覇気、悪魔の実、そして、この世界に存在する技の全て」

言葉が発せられると男を淡い光が包み込み、一瞬で消えた。

「…あとは、こいつの後始末だけか」

死に絶えたマダラの死体を勾玉文様が浮かんだ両目で見下ろした。

「ロード…天照、神威」

黒い炎がマダラを包み込み、そのまま周りの空間ごと次元の狭間に吸い込まれていった。

「これで、この世界の俺の役目は終わった…後はお前ら次第だぜ、ルフィ、エース」

そうして、男は両目を元の黒い瞳に戻し、どこから取り出したコートを羽織りこの世界から消えた。

しばらくして、男がいた場所に数名の海賊たちが駆け寄ってきた。

「おーい、裂也く…どこだあ!？」

「まさか、あいつ」

「…何も言わずに去りやがったか、あのクソ野郎!」

「そんな…私達まだ何もあの人にお礼も何もしてないのに…」

「お、おい、これ見ろよ、皆!」

「ん、うわあゝ!?!なんだこりゃー!?!」

「地面がえぐれて、木が根こそぎ吹き飛ばされて…まるでここで戦争があったみたいね」

「裂也の野郎、やっぱり1人でケリつけやがったな…」

「…裂也さんらしいですね」

「馬鹿野郎、かっこつけすぎじゃねえか!!」

海賊達はその場で静かに空を見上げた。

自分達を幼い頃から鍛え上げ静かに見守っていてくれた大恩人の事を考えながら…

続

プロローグ（後書き）

はい、何の事かさっぱりだと思いますが、次回からじわじわと明かして行こうと思います。

物語の導入部としてはこれくらいがちょうどいいかな？

すでに主人公はいくつかの世界を廻っています、そして技や魔法を取得しています。

次回から廻る世界は…どこでしょう？（オイ）

主人公設定もなるべく早く上げます。

プロローグ2（前書き）

プロローグ第二幕。

主人公のちょっとした設定などの話です。
本格的な話は次回からスタートします。

プロローグ2

『おかえり』

「ああ、戻った」

『ムゲンアーク』へと戻り、A I『ゼオン』の出迎えを受けて、ようやく一息付けた。

俺の名はカイン：偽名だが、名前がないと不便だから適当に名乗ってる。

もう何百年続けてるかは：忘れたが俺は様々な『世界』を廻って戦い続けてきた。

『世界』は無限にある。世に言うアニメや漫画や映画も実在する世界の話だ。

詳しい事はあまり考えた事はなかったが、例えばさっきまでいた『世界』の例にすると

色々な世界では『ONE P I E C E』という名で漫画やアニメとして描かれているが

これもれっきとした『存在する世界の1つ』だ。

そのONE P I E C Eの世界での俺の使命は2つ。

？麦わら海賊団とエースの強化。

？N A R U T Oの世界から紛れ込んだ、うちはマダラとカブトの抹殺。

？に関しては、よくある『原作ブレイク』というやつだ。

世界には一定の『流れ』がある、だが流れが一定過ぎるとたちまち閉塞感に陥り、その世界は消える。

それを防ぐための『原作ブレイク』そして、外部の者が行う事でその世界は進化する。

乱す者が強く、大きくかき乱す事が重要らしい。

ゆえに様々な世界を渡り歩き様々な能力を得ている俺の使命にはよく『原作ブレイク』が入る。

？に関しては：内容が毎回微妙に異なるが『世界の敵』の排除だ。
ONE P I E C Eの世界に存在しないはずのうちはマダラとカブト：

この2人がONE P I E C Eの世界で黒ひげと手を組み世界を破壊しようと企んでいた。

それを同じ異世界の俺が倒す：ルフィや白ひげですら手を焼きそうだからな：

こういう風に異世界から紛れ込んだ『異物』、もしくはその世界に元から存在するが

世界にとって危険な存在の抹消、それが俺の主な指令の1つだ。

大抵の場合、俺が排除すべき者達はその世界の『主人公』達では到底倒せない相手だ。

だからこそ：『化け物』の俺が相手をする事になるのだが。

「早速だが、覇気と悪魔の実の能力の確認をするぞ」

『では、いつも通り魔械兵^{ドール}を1万体制ど？』

「ああ、すぐにだ」

俺はいつも『世界』を廻る度に得た能力の確認の為にアークの訓練室に行く。

ここはドラゴンボールの世界で得た『精神と時の部屋』を元にした部屋だ。

流石に完全再現は出来なかったが、それでも広大な空間と劣悪な環境、特に重力は高めにしている。

周りの被害を考えずに暴れるにはもってこいだ。

ムゲンアーク 特殊訓練ルーム

「さてと…まずは…ゴムゴムから行くか、最初からブツ飛ばしていくぞ」

無詠唱でゴムゴムの実の力を使う。

ただの肉体変化などの能力を引き出すにはロードのコマンドはいらない。

だからこそ、素早く力を引き出せるのが利点だ。

『行きます』

声と共にどこからともなく現れたのは沢山の白い魔械兵達。

別に形は拘っていないので不格好と言えば不格好だ、しかも形も揃っていない。

でも、見た目に誤魔化される事はない、作ったのは俺なのだから。

中身は魔力と機械で出来ていて、機動性と攻撃力、防御力は半端なく高い。

制御は自動ではなく1万體1體1體をゼオンが動かしている。

超高速自動並列処理は機械と人間が戦争をする『ターミネーターの世界』で覚えた事だ。

「ゴムゴムのJETガトリング！」

足に力を籠め、ポンプの用に血流を加速させて体中の身体能力を強化する。

ルフィはこれで大分体への負担をかけていたが…訓練を重ねて、負担を軽くする事が出来るようになった。

才能云々ではなく、数百年も色々な世界で様々な敵を相手にしてき

た中で培われてきた経験からくるものだ。。

両手に力を籠め、迫りくるドールへ拳を高速で連続して打ちだす。

『なんの』

数体は壊れたが、残りは目にも止まらない拳の乱打の間をすり抜け
てくる。

そこで俺は能力を変更した。

「…紙絵！」

自身を紙のように変化させ、ドールの攻撃を避ける。
そして、数時間が過ぎた。

「…ダメだダメだ、やっぱこんな基本能力ばっかやっても全然タ
メにならない」

『そうだな…無意味だな』

あれから、悪魔の実の超人系、動物系と六式を一通り試したが…
どれもこれも俺の身体能力で再現出来る技ばかりだ。

例えば、嵐脚は普通の蹴りで十二分にカマイタチを起こせるし、ス
パspaの実を使わなくても手刀で十分。

「ドルドルだって肉体変化で体を液体とかに変えた方が効率もいい
し…」

こうして試行錯誤を繰り返し、効率の良い能力の選別をしていく。
覇気も武装色はロギア系の能力者相手には有効だが、別の世界で通
用するかはその世界次第。

見聞色は相手の微かな息遣いで動きを見切れるので特に必要ではない。

「……つくづく化け物だな、俺は」

自嘲するように笑い、訓練の仕上げを行う。

1万体のドールによる総攻撃、とはいえただ闇雲に迫ってくるだけではない。

先程までのドールと違いこれらは特別なドール達だ。ゼオンの指揮の元コンビネーションも使ってくる。

無限刃を構えたドールもいれば、ビームライフルを構えたドールに宝貝、ロトの武具：e t c

今まで俺が得た世界の力を一体一体に付与された特別製。

これを実用化出来れば楽になるのだが：あいにくこれは訓練用、アークから外に出せばなぜか消滅する。

うまくいかないものだ：

「そんじゃ：仕上げ、行くぜ」

右手を炎に、左手を氷に、右足を光、左足を闇に：さらに背中からは雷や砂の腕を生やす。

能力の多重同時稼働：これをちゃんと出来るようになって、初めて極めたと言える。

そう言えば、今回訓練を初めて何年経過してるんだろうか：

いつも訓練を始めると軽く数年は過ぎてしまうので時間感覚は狂ってしまう。

もつとも、アーク内では時間の概念はないようなものだし、空腹などに襲われる心配もない。

でも：世界に降り立つと空腹や睡魔に襲われるようになるのはなぜだろうか？

・
さらに数年が過ぎた。

そろそろ次の世界への指令が来る頃だと思っていたら早速来た。

もう慣れてしまったが、次の世界の指令が来るまでアーク内で待機する事になる。

誰から来るのかは疑問に思った事はない：『世界の意味』か『あった事のない誰か』か：

それすらどうでもよくなっている、俺はただ：指令が来たら動くだけだ。

アーク自体は無色透明な『世界の海』と言う空間内から動けない。要するに：訓練以外する事がない。

ゼオンからの連絡でアークの指令室に向かう。

体を持つものが俺しかないが、アークの指令室には操縦席や管制官の席もある。

不要なのだが：ないとないで落ち着かないので作った。

例えば座る人間が絶対に現れる事はないのに、あるのとないのでは雲泥の違いだ。

「：女々しいな：だから後悔したと言うのに：」

頭を振り、気持ちを切り替え、自分の席に座る。

『これが次の世界の資料です』

アークのメインモニターに次に向かうべき世界の情報が映し出される。

そこに映しだされた数人の戦士と文字を見る、そこに書かれていた言葉は。

「仮面、ライダー…次は仮面ライダーの世界か」

また新しい世界へ…新たな戦場へ、こうして…俺の贖罪は永遠に続いていく。

N E X T W O R L D ..仮面ライダー

プロローグ2（後書き）

カガヤ

「はい、おはこんにちわ：今回から後書きを開始！パートナーはムゲンアークの超高性能AIゼオン！」

ゼオン

「なんでAIの俺なんだ？」

カガヤ

「カイン（仮）曰く『ゼオンは俺のコピーだからゼオンだけでいいだろ』：だそうだ」

ゼオン

「確かに俺はあいつのコピーだけだなあ：まあいいや」

カガヤ

「というわけで：最初の世界はどれにするか迷いましたが仮面ライダーの世界にしました！：どういう設定の世界かもちゃんと書きますのでご安心を：ヒントを言うならば『平成仮面ライダーの世界』と言えばいいでしょうか？」

ゼオン

「仮面ライダー：大丈夫なのか？」

カガヤ

「が、がんばります（汗）」

I n t e r m i s s i o n 〈 出 撃 準 備 フ ェ イ ズ 〉 (前 書 き)

無駄に設定凝り過ぎたかもしれない…けど後悔はない！
これから各世界に渡る前はこういう準備話があります。
(笑)

Intermission 〈出撃準備フェイズ〉

《【指令】

？風都にて世界融合実験を企んでいる『財団X』の崩壊。
？仮面ライダーディケイドの観察、必要ならば抹殺。

【能力制限】

- ・魔力、霊力など力を伴わない剣技、格闘技以外の使用を禁ずる。
- ・気力による治療、初級補助魔法は例外的に可。
- ・仮面ライダーの姿になる時のみ、特殊能力使用可。》

アークのメインモニターに表示されると、必要な世界の知識が俺に流れ込んでくる。

「…複数の次元世界が存在しそれぞれ仮面ライダーと呼ばれる者が存在している…か、珍しい世界だな」

仮面ライダー…皆の笑顔を守る為、皆の居場所を守る為…etc
戦う理由に差異はあれど、人々を守る為に命をかけて戦う人達。

「そんなのになれ、だなんて相変わらず変な指令だ…俺はライダーに倒される怪物側なのに」

この世界は仮面ライダークウガの世界、アギトの世界…と言う風に様々な世界が繋がっていて

1つの巨大な『仮面ライダーの世界』として存在するようだ。

しかも、クウガの世界でもクウガに変身するや存在する敵が事なる『平面世界』も多数ある。

例えるならば仮面ライダーの世界という巨大な樹があり、五代雄介

がクウガとなり戦う

他の世界で作品として認識されている『クウガの世界』という枝から更に

小野寺ユウスケという別の青年がクウガになる世界が枝分かれしている、そんなイメージだ。

主人公の辿る道筋が事になっているパラレルワールドとは微妙にニュアンスが違う：ややこしい事だ。

ライダーの世界と世界を渡る事は『灰色のカーテン』により行き来が可能で、自由に使えるものは極わずか。

一度世界同士が衝突を繰り返して全ての世界が消滅しかけた事があるが仮面ライダーディケイドとその仲間達の活躍により世界全体は安定している。

「…その時以上の危機が訪れているから俺が行く、か」

詳しい計画などは情報にはなかったが、まあいい、その世界の未来の出来事を伝えてくるかと思えば

全部現地で調べると言われる事もある。それにしても財団X：なかなかえげつない事を企んでいるようだ。

「よしっ…ならば、早速準備に取り掛かるか……クリエイト！」

コマンドを実行すると俺の周囲に小型の空間モニターが沢山現れる。

「身体能力…は各ライダーの平均値よりも若干高め…能力は剣、銃、格闘技関係をリストアップ」

現在俺が使える各世界の能力や魔法がウィンドウにリスト化される。

「剣技は通常時でも使用に問題ない飛天御剣流や剣心の世界を中心

に：銃は魔法を中心に：

格闘技は、各ライダーの必殺技を参考に組み上げるか：」

世界の力はその世界で使命を終えなければインストール出来ないが単純な技なら見ただけで覚えれる。

「さらに4属性に変化可能にして、その際の外見変化をこうして：よしっ、完成！」

メインモニターに俺が創造した姿が映し出された。

『仮面ライダー：デュエル、決闘者か？　しかも随分と強力な力を持つてるな』

「向こうには多種多様な能力持った怪人と下手をすればライダーが相手だし、それとゼオン」

『なんだ？』

「これはデュエル、ただの戦闘者：仮面ライダーなんかじゃない。ライダーの皮を被った：」

『化け物：つくづく自虐的だな』

「そのコピーなお前も同じだぞ？」

『……違うない』

ゼオンとの話の間にデュエルのベルトが完成した。

左腰に柄のみの剣、右腰に銃を備え、中央にはいくつかの宝玉が埋め込まれたベルト：デュエルドライバー。

それを腰に巻きつけると、消えるように体に吸い込まれた。

と、同時に俺の体も変化する、新たな世界に順応した身体能力と能力制御をかけられて

「…行くぜ、ライダーの世界！」

【世界解説】

◎仮面ライダーの世界

- ・仮面ライダーWの風都が舞台。
- ・クウガ〜Wまでのライダーが敵ライダー、劇場限定、強化体も含めて多数登場予定。
- ・オーズは設定上存在するが、登場するかは未定（作者がよく見ていないため（汗））

・ライダー変身者は五代雄介などの原作主人公と小野寺ユウスケなどのイマジキャラの2パターン予定。

電王だけは超電王シリーズも含めて同一世界設定、よって電王だけ原作変身者のみ。

・劇場版は電王（超電王シリーズも含む）W、MOVIE大戦2010、COREのみあった設定。
オールライダー対大ショッカーはなし。

・各ライダーは原作終了後設定。W、オーズ（登場すれば）はCORE終了後設定。

【カイン解説】

名前…

相良 悠也（通称…ユウ）

・適当に付けた名前の為意味はない。

外見..

短めの茶髪と釣り目、服の上からでは分からないが整った筋肉質。

服装..

全身黒、龍騎の蓮のような服装。コートの中には銃やナイフが多数仕舞われている。

全身に隠し武器を持っている。

能力..

身体能力は各ライダー主人公よりも高め、気配を消す、気配を探る、怪人が人間に化けた姿を見分けれる。

簡単な傷や毒なら治療出来る気功術が使用可能。

視力、動体視力は集中すればクウガベガサスフォーム並になる。

戦闘能力は銃器や剣・ナイフを用いてマスカレイドドーパントを簡単に蹴散らせる程度。

【オリジナルライダー..仮面ライダーデュエル】

・外見

フォルム..通常時スタンダードフォームはWのようにシンプルな見た目。

頭部..ウイングガンダムのような角が生えていて、マスクが付いている。

色..全身は黒と白の2色で構成されている

両腕、両脚の内側、腹部と胸部の中心部、頭部マスクが白

それ以外の部分が黒で、間接部分と色が分かれているラインは金色。

両目…赤紫色の水晶のような眼。

戦闘スタイル…

格闘とベルト両腰に付いた剣と銃を用いて戦う。

格闘で戦う時は、カウンターや空手など多種多様な戦い方になり
剣を使う時は、飛天御剣流やアバン流刀殺法などの漫画やアニメの
技を元に使って戦う。

また、銃を使う時は、魔力を用いて魔力弾をほぼ無限に発射する。

その他…

カインⅡ悠也がデュエルドライバーの力で基本フォームと4つのフ
ォームに変身するオリジナルラ。

ただし、カインはライダーを名乗りたくないなので自分をライダーで
はなくデュエルとしか言わない。

変身時はクウガ、アギトのようにベルトが体から浮かび上がる。

変身ポーズ…

← ?拳を握り、両手を胸元で交差させるとデュエルドライバー出現

← ?変身! と叫ぶ、同時に両手を一回転させ、大きく広げる。

← ?コアクリスタルから5色の光が全身を包み込み、変身完了。

◎ デュエルドライバー

中心に透明のコアクリスタル、その四方に赤、青、緑、黄色の、計
5つのクリスタルが付いた形状。

左腰に柄のみの剣、デュエルセイバー。右腰には銃、デュエルガン

が付いている。

各フォームに変身すると5つのクリスタル全てがそのフォームに対応した色に変わる。

中心のクリスタルにパワーを集中する事で必殺闘技が発動する。

更にクリスタルをデュエルセイバーの柄にいれる事で必殺剣技が

デュエルバスターの撃鉄部分にセットする事で必殺魔導技が発動する。

◎ デュエルセイバー

通常は柄だけの状態でベルトの左腰に付いている。

ベルトから外すとフォーム毎に違った形状と色の刃が現れる。

柄にはコアクリスタルをはめる穴がある。

◎ デュエルガン

ベルト右腰に付いた銃。

バルカンモード、ランチャーモード、ファイナルモードの3タイプがある

バルカンモードは威力よりも連射力にすぐれている。

ランチャーモードはバスターのバレルが伸び射程と威力にすぐれるが連射力は劣る。

ファイナルモードは撃鉄部分にコアクリスタルをはめ込む事で追加の銃身が出現する

必殺魔導技モード。

◎ フォームチェンジ

デュエルは基本のスタンダードと4つのフォームに変身する。

それぞれに特殊能力が加わり、直接変身可能。

また各4フォームに変身すると全身にそれぞれの色をしたアーマー

が追加される。

・スタンダードフォーム

基本フォームで、特殊能力は何もないが、標準的な戦闘力を持っている。

セイバーの刃は形状がロングソードで、色は銀。

ガンのファイナルモードでは銀色の追加銃身が現れる。

＜必殺闘技＞

デュエルキック…右足に光が集まり、空中で一回転しながらの飛び蹴り。

クウガのマイティキックを元にした。

＜必殺剣技＞

デュエルストラッシュ…セイバーを逆手に構え、刃に光を集中させて一気に斬りつける。

斬撃がある程度飛ばす事も可能で、ダイのアバンストラッシュを元にした。

＜必殺魔導技＞

デュエルバスター…貫通力のある銀色の砲撃を放つ。

なのはのディバインバスターを元にした。

・ファイヤーフォーム

炎属性のフォームで、ベルトのクリスタルが全て赤に変わり、全身に赤い炎のようなアーマーが付く。

攻撃力はあがるが、防御力が下がる。

セイバーの刃は形状が大剣、色はオレンジになる。
ガンのファイナルモードでは紅の追加銃身が現れ、バズーカのような形になる。

また、ガンから放たれる魔弾はメラ系の魔法を打ち出している。

<必殺闘技>

フレイムボンバー…右手、もしくは左手に炎を集めて拳を突きたてる。

アギトのバーニングライダーパンチを元にした。

<必殺剣技>

バーンクラッシュ…炎を纏ったセイバーを突き刺し、柄の後ろから炎が噴射し敵ごと遠くへ飛び爆発する。

特に参考にした元はない。

<必殺魔導技>

マグナバースト…巨大な炎の塊を放ち相手を包み込み爆発する。
メラゾーマが籠められている。

・サンダーフォーム

雷属性のフォームでベルトのクリスタルが全て黄色に変わり、全身に軽装鎧が付く。

速度が上がリ、必殺技中は30秒間だけ雷光に近い速度で移動が可能になる。

攻撃力は下がるが、アクセルトライアルのように速度でカバーする戦法。

セイバーの刃は形状がナイフ状、色は黄色に近い白。

ガンの害なるモードでは黄色い追加銃身が現れ、ガトリングのような形になる

放たれる魔弾はデイン系の魔法。

<必殺闘技>

ライトニングコンボ…両手で激しい乱打を浴びせ、左足で数回蹴り上げ、空中で右の踵落としを決める。

ガイやリーの表蓮華を元にした。

<必殺剣技>

ギガレイダー…全身を高速で切り刻み、最後に突き刺し、内部から激しい電撃を浴びせる。

特に参考にしたものはない。

<必殺魔導技>

ガトリングスパーク…ガトリングのように雷の魔弾を浴びせる、複数の敵にも有効。

G3-Xのケルベロスを元にした。

・ウインドフォーム

風属性のフォームで、ベルトのクリスタルが全て緑に変わり、全身に羽のような装飾が付く。

飛行能力を得る、攻撃、防御が少し低下するが他のフォームよりは下がり具合は低い。

セイバーの刃は形状がショートソード、色は薄緑になる。

ガンのファイナルモードでは青緑の追加銃身が現れ、スナイパーライフルのような形になる。

ガンから放たれる魔弾はバギ系の魔法を打ち出している。

<必殺闘技>

ハリケーンスマッシュ…全身に竜巻を纏った蹴りで、バリアなどを破壊する効果がある。

本来バリア破壊効果はないが、555のクリムゾンスマッシュを元に考えた。

<必殺剣技>

トルネードインパクト…渦状の突きを放つ、貫通力に優れ離れた敵にも有効。

ヒュンケルのブラッティスクライドを元にした。

<必殺魔導技>

エアロシュート…追尾性能がある、圧縮した風の魔弾を放つ、射程、弾速は全必殺技中最高。

クウガのブラストペガサスとWのトリガーフルバーストを元にした。

・フリーズフォーム

氷属性のフォームで、ベルトのクリスタルが全て青に変わり、全身に氷のような鎧が現れる。

防御力に優れ、スピードが若干下がる。

セイバーの刃は形状がレイピア、色は水色になる。

ガンのファイナルモードでは蒼い追加銃身が現れ、魔弾がヒャド系魔法の冷凍レーザーになる。

<必殺闘技>

ブリザードスライサー…地面を凍りつかせ、凍気を纏った手刀を×型に交差させ、滑るように切り裂く技。

特に元になった技はない。

<必殺剣技>

アイスパイク…レイピアの先から氷の蛇を放ち、敵を凍りつかせ、突き壊す。

水鏡の氷成る蛇を元にした。

<必殺魔導技>

フロストビーム…絶対零度に近いビームを放ち半径数十メートルの空間ごと凍りつかせる技。

特に元になった技はない。

Intermission 〈出撃準備フェイズ〉（後書き）

ゼオン

『…どれだけ、凶悪なライダーを作れば気がすむ？』

カガヤ

「いやぁ…：ははっ、やりすぎたかな？（汗）」

ゼオン

『うまく活かせるのか？』

カガヤ

「能力に対応する敵は考えてるよ…既存の怪人だったりオリジナル敵だったり…」

ゼオン

『オーズはどうするんだ？…あまり見てないようだが』

カガヤ

「…どうしようかな、色々複雑そうだから…本当に困った、でも出すにしても出さないにしても話は考えてるけどね」

ゼオン

『それといい加減話を進ませろ』

カガヤ

「すみませんでした！…！ペコリ（〇――）（〇）（）」

第1話 Kとの遭遇／風の都に迫る嵐（前書き）

連日投稿！…ネタが浮かぶ（笑）

今回は作者イチオシのライダー達が初共演！

第1話 Kとの遭遇／風の都に迫る嵐

鳴海探偵事務所

S i d e 左翔太郎

俺の名は左翔太郎ひだりしょうたろうハードボイルドな探偵さ。

今俺と相棒のフィリップ、そして風都はある不可解な事件に遭遇している。

時間も場所も関係なく街の至る所に怪人が現れ、人を襲い：煙のようになに消えると言うものだ。

そして、この事件の最初の目撃者は何を隠そう、俺と仲間達だ。

あれは今から数週間前、とある依頼を解決した後の話だ。

あの事件も嫌な事件だった、依頼内容は『殺人狂になった兄を止めてほしい』だった。

なんでも依頼人の兄貴の恋人であり、依頼人の親友でもあったとある女性が殺され

犯人は逮捕されたものの、証拠が上がらず本人も否定した為釈放されてしまった。

それに納得がいかない兄貴はガイアメモリに手を出し、犯人に復讐を企んだ。

『ガイアメモリ』それは地球の歴史が内包された特USBメモリ型の生体感応端末。

それを使用する事で『ドーパント』という怪物に様々な能力を得る事が出来る。

しかし、副作用もある。メモリのパワーに精神を囚われ暴走してしまう。

兄貴は犯人に復讐を果たした後で、暴走してしまい：夜な夜な人々

を襲う怪物に変わってしまった。

世間を騒がせていた通り魔事件の事を調べていた矢先だったので早速俺達は調査を開始。

兄貴が潜伏している場所を突きとめたが、そこで意外な事実が分かった。

依頼人がわざと兄貴にガイアメモリを使う事を提案したのだ。

親友の仇を討ちたいがガイアメモリの副作用を知って怖くなり、兄貴を利用したのだと言う。

それを知った兄貴は実の妹に襲いかかった。そこで俺達『仮面ライダーW』の出番ってわけだ。

さほど苦戦もせずに『メモリブレイク』でガイアメモリから兄貴を救い出し、兄妹共々逮捕…と言う

少し後味の悪い結末になってしまったな…おっと、肝心の話はここからだぜ？

事件を解決させ、俺は事務所に戻ってきた、その時だった。

（ドカーン！） 「…キャー！！」 「うわああ怪物だあ！」

「…怪物？ それに今の爆発音は…」

「翔太郎！」

「翔太郎君！」

ドアが急に開き、中からフィリップと事務所の所長（？）の亜樹子が飛び出してきた。

「うおっ、フィリップに亜樹子…その様子だと、今の音」

「ああ、聞こえたよ…すぐ近くだ、行ってみよう」

「私も行く！ 竜君にも今電話したよ！」

急いで悲鳴のあった場所に駆け付けた俺達が見た物は

「な、なんだこれは…」

一面が瓦礫と化し、血まみれの人々が倒れていた。音がして10分程度しか立ってないのにこの惨状、フィリップと亜樹子も茫然としていた。

「翔太郎君、フィリップ君…あ、あそこ！」

亜樹子が大声をあげて指さす方を見ると、不気味な怪物が煙のように消える瞬間だった。

「なんだったんだ、ありゃ…」

「分からない、ドーパント？ いや、しかし…」

一先ず救急車を呼び、怪我人の介抱をした。

幸い、全員命に別条はなかったが、合流した照井^{てるい} 竜^{りゅう}の言葉にさらに衝撃を受けた。

「街の至る所で似たような事件がほぼ同時に起きた…いずれも怪物が突然現れ煙のように消えた」

それから今日まで、謎の襲撃事件は時間も場所も関係なく発生した。俺や照井も、現場にてすぐに向かい、変身しようとするが、怪物はすぐに消える事が多く

まともに姿を見た事は一度もなかった。

怪物は突然どこからか現れ辺りを破壊して、人々の襲い、煙のように消える。

この不可解な事件に俺達も警察も手の打ちようがなく、焦りと苛立

ちを強めて行った。

・
・
・

そして、今事務所の地下にあるガレージで怪物に関する情報をフィリップや照井と纏めていた。

「24時間体勢で警官を配備し警戒に当たらせてるが…それでも得られる情報は少ない」

苛立ちを必死に隠そうとしながら照井はコーヒーを飲んだ。

「しかし…新婚旅行帰りに、こんな厄介な事件が起きるなんて…」

照井は亜樹子と結婚し、新婚旅行から帰って来たばかりで今回の事件が発生した。

「いや、逆に考えれば新婚旅行中に発生しないだけまだ良かったと思うべきだな…」

もし新婚旅行中に事件が起きていたら間違いなく途中で帰って来ていただろう。

照井は結婚してから風都を愛する心が増してきたように思える。

「竜君…それにしても、怪物の正体って一体なんだろうね、ドーナント？」

コーヒーカップを取りに来た亜樹子が考え込む。

確かに、こんな事件を起こすのはドーナントしか考えられない…が。

「いや、ドーパントとは考えられない」

考え事をしていたフィリップの言葉に全員の視線が集まる。

「僕も最初は人々の記憶から沢山のドーパントの幻を出現させている。と考えた」

「確かに、俺も最初はそんなもんだと思ったんだよね」

「でも、違う…該当するメモリの能力ではこんなに短期間で複数の…しかも実体があり、物理的被害を

広範囲にもたらすのは不可能なんだ。と言っても情報が少なすぎて検索は不可能だ」

そう言ってフィリップはボードに張られた沢山の怪物の絵を見つめる。

短時間で消えてしまう怪物の映像や写真は一切なく生存者の微かな記憶を頼りに絵を描いたものだ。

「どれもこれも、はっきりとしない。しかも見た目もバラバラだ、規則性も何もない」

照井の指摘通り、描かれた怪物の姿はドーパントとは違う印象を感じる。

しかも、毎回違う姿をしていて、何体いるのかも分からない。

生存者達は朦朧とした意識の中で目撃した姿なので細かい部分は覚えていない。

「これは…まさか…」

絵を睨むように見ていたフィリップが何か思い当たる事が浮かんだようだ、その時だ。

「りゅ、竜君！ 翔太郎君！ フィリップ君：早く、早く来て！！」

尋常じゃない亜樹子の声が事務所に響き俺達は急いでガレージから上の事務所に上がった。

「どうしたんだ、所長！：こ、これは！？」

「なんてことだ：」

事務所のテレビに異形の怪物の姿がはっきりと映し出されていた。怪物は赤茶色の体の上に深緑色の装飾がついた鎧がついたで、髭と2本の角を生やしている。

両手に付けたメリケンサックのようなもので次々と通行人を殴り殺して行く。

ドーパントよりも人間らしいフォルムと言えなくもないが：見ただけで分かった、こいつはドーパントなんかじゃない。

「テレビ付けたら、ちょうど生放送のお店の紹介コーナーだったの：でもいきなり怪物が現れて」

カメラマンがやられたのか、地面に落ちたカメラが人々を襲う怪物の姿を移し続けていた。

すぐに画面がスタジオに切り替わった。

「こいつは：間違いない！」

フィリップの声と同時に照井の携帯が鳴った。

「ああ、俺だ：：何っ！？ 分かった、すぐに向かう。これ以上犠牲者を増やすな！」

「どうした、照井？」

「サソリのような姿をした鎧の怪物が現れたらしい…左、今回の怪物はすぐには消えないみたいだ」

「そうみたいだな、照井…そっちは任せたぜ！」

「うむ…所長はここに残っていてくれ」

「竜君…死なないよね？」

「ふっ、俺に質問をするな…」

軽い惚気をみせて照井は事務所を飛び出した。

「僕も行くよ、翔太郎！」

「おう、行くぜ相棒！」

俺とフィリップも後を追うように外に飛びだした。

「今日こそ怪物の正体暴いてやるぜ！」

「翔太郎、今回の怪物はもう正体は掴めたよ…恐らくアレは…」

フィリップが怪物の正体を言おうとした時、ちょうど現場に到着した。

「話は後だ、早く変身するぜ」

「そうだね…待った、翔太郎。誰か怪物と戦っている！」

フィリップが驚いた声をあげ、俺も怪物の方を向いた。

怪物と誰かが戦っている…赤い鎧を纏い黒いマスクに黄土色の2本角が生えたアレは

俺にも見覚えがあった、以前スーパーショッカーと戦った時にいた仮面ライダー…その名は

「「仮面ライダーウガ!？」」

Side out

Side 五代雄介

2000の技を持つ男こと、俺、五代雄介^{いだいゆうすけ}は3年前の冬に長野の
ある場所で

グロンギの長であり究極の闇をもたらすもの、ダグバを死闘の末に
倒し、そのまま旅に出た。

別に何か目的があったわけじゃない、ただ…青い空が続く果てまで
行ってみたくなった。

そうして、色々な国で色々な人達と触れ合い、一度日本に戻ろうとし
た、その時だ。

「…な、なんだ!？」

突然稲妻が辺り一面に走ったかと思うと俺はビートチェイサーごと、
白い光に包まれてしまった。

そして、気が付くと…見た事もない街にいた。

「あ、あれ? ひょっとして…日本? でもここどこだろう?」

ビルや店や電柱には『風都』と言う文字が目立った、ここの名前だ
ろうか?

「でも、風都なんて街日本にあったかあ…」

ひとまず、ぼーっとしてても始まらないので人の多い場所へとバイクを走らせる事にした。
すると、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

「きゃー！…ま、また怪物よ！！」

「ぎゃあああゝ…」

「た、たすげ・・・」

聞こえてくる悲痛な叫びに心が痛くなる、こんな声はもう聞きたくなかった。

俺は急いで悲鳴のする方へ走った、そして、惨劇の中心にいた異形の姿に俺の心臓は跳ね上がった。

「だ、第45号！？…どうして、グロンギはもういないはずなのに！」

「……………」

第45号がこちらに気付いて向かってきた。

「ぐっ…出来るのか、今の俺に…でも、やらなきゃ……………変身っ！！」

3年前、ダグバを倒してから久しぶりに力を籠め、高らかに叫んだ。
蘇る戦いの感覚とアマダムの鼓動…俺は、古代の戦士クウガへと変身した。

「…っ、クウガ！！」

45号は拳を振りかざし殴りかかって来た。

とっさにかわそうとしたが、数年ぶりの戦いのせいか思うように体が動かずに殴り飛ばされる。

「がっ！…ふう…」

赤の鎧に45号の拳の後が付く、あの戦いの痛みが蘇り、苦痛が全身を駆け回る。

でも、怯む事も逃げる事も考えない…俺は、戦士クウガだから、皆の笑顔を守る為に…戦う！

「おりゃあ！」

「っ！？」

右の拳が45号へと突き刺さる。だけど、意にも返さずにまた殴り飛ばされた。

強い、あの時は一条さん達の援護とゴウラムがあったからかうじて勝てた強敵。

今は…少なくともこの場には一条さん達もゴウラムもいない。

「超変身！…出来た！」

出来るか不安だったが、ぶっつけ本番で超変身を行い青いクウガに変わる。

周りにはまだ息がある人達が倒れている。

それにあいつを倒すにはもっと開けた場所にいかないと大爆発を起こす。

まずはここから離れないと！

「…こっちだ！」

ゴウラムがいけない以上、俺が凹になって引きつけるしかない。
青いクウガは、攻撃力は低いが、俊敏さとジャンプ力が高い。

飛び跳ねるように距離を取りながらこの場を離れる。動きの鈍い4号では距離を取れば

少なくとも攻撃は当たらない…そう、思っていたのは俺の甘さ。

戦士としての勘が鈍った事で、致命的なミスを犯した。

「……ふんっ！」

45号は全身に力を籠め、赤茶色の体を更に濃くし両肩に角を生やした姿に変わった。

紫の鎧ですら凹ました、あの姿だった。

そして、胸の飾りをハンマーに変化させると、飛び跳ねる俺に向けて投げ飛ばしてきた。

「うが…っはあ！」

固い紫の鎧にすら穴をあけるハンマーだ、防御の低い青い鎧ではひとたまりもなかった。

胸にハンマーが突き刺さったまま地面に転がり落ちる。

「あっけないな、クウガ」

45号に腹を力強く踏まれ、意識が遠のく。

（ダメだ、このままアレを受けたら…紫に…ならないと）

45号はハンマーを持ち上げ、俺の顔めがけて振り降ろした。

（やられる…!）

『CYCLONE・TRIGGER!!』

「えっ？」

バキンッ

突然誰かの声が聞こえ、何か銃弾のようなものが飛んできて45号のハンマーを弾き飛ばした。

「ぐっ…！」

急いで45号から離れ、赤いクウガに戻り銃弾が飛んできた方を向くと

「よお。大丈夫か、仮面ライダークウガ？」

右半身が緑、左半身が青く、銃を構えた戦士が自分の事を『仮面ライダークウガ』と呼んできた。

Side out

旧ミュージアム 地下アジト

Side カイン改め相良 悠也

ライダーの世界に降り立った俺は、風都のライダー、Wとアクセルに会う前に少しでも情報を仕入れる為に財団Xと提携し、Wとアクセルによって崩壊させられたミュージア

ムのアジトにやってきた。

「…地下は完全に崩壊…ん？」

地下は完全に崩壊していたと思ったが、どこから風が吹いている事に気付いた。

「この、下か」

瓦礫をいくつか払いのけると、地下への入り口を見つけた。

「隠し通路か…さて、何が出てくるか」

入口を抜けると、そこは何かの研究所のような施設にたどり着いた。施設中央にはダブルドライバーのようなベルトが数本とジュラルミンケースがいくつか並べられている。

「これは……っ、誰だ!？」

たくさんの気配を感じ、警戒すると返事の代わりに銃弾が返ってきた。

「ちっ！」

とっさに近くの機械に隠れ、様子を窺うともう1つ広い入口があったらしく、そこから白い服を着た男女と

黒い防護服のようなものを着込んだ数十人の団体がこちらに歩いてきた。

「嫌な予感が来て護衛をたくさん連れてきて正解でしたね」

「全くね、こんな所を見つける子ネズミがいるだなんて…しかもあの、ダブルでもアクセルでもない」

2人の男女は白い服以上に白い髪と水色の瞳でこちらを睨んでいる。どうやら、来て早々に情報が向こうから飛び込んできたようだ。

「ネズミじゃない…俺は、化け物だ！」

機械の影から身を低くして飛び出す…さあ、戦いの始まりだ。

S i d e o u t

続く

第1話 Kとの遭遇／風の都に迫る嵐（後書き）

カガヤ

「俺の好きなクウガとWをまずは出したかったあー!!」

ゼオン

「なるほど…この様子では照井やユウの方にも？」

カガヤ

「次回以降で2人の所にも別のライダーが現れる予定…誰が出るかは、照井の方は予測できる、かな？（笑）」

ゼオン

「全キャラと全ライダーを出すのか？」

カガヤ

「うん、それ無理（爆）全オリジナル主人公とイマジライダー全員は出すけど、サブライダーは全員じゃない予定…結構出すけどね、出ないと話回せない（苦笑）」

ゼオン

「オールライダーの時のようなライダーのみの出演は？」

カガヤ

「一部のライダーはその予定だけど、けど変身前の共演も結構出すよ。話は考えてあるから…あ、リリカル異伝もちゃんと書いてますのでご安心を（笑）」

ゼオン

「駄作者の作品などどちらもみな見ていないだろうがな…」

カガヤ

「―(T―T)↓グサツ!!…ら、ライダーの口調などに違和感ある場合はご教授お願いします…一応全テレビシリーズはDVDなどで見ていますが(汗)」

第2話 Kとの遭遇／集うライダー達（前書き）

ライダーがある程度揃ったら1人称にするつもりです。
ちなみに原作怪人もオリジナル怪人も出しますが
原作怪人の場合、強くなっています。

第2話 Kとの遭遇／集うライダー達

風都 商店街

Side 翔太郎

フィリップと謎の怪物が現れた現場にかけつけた俺達はそこで怪物と戦う赤い戦士の姿を目撃した。

「なんで仮面ライダークウガがここにいたんだよ…ディケイドもいるって事か？」

確かクウガはディケイドと一緒に旅をする仲間だったはず。

「わからない、けど…クウガがここにいるのは納得出来る、あの怪物は『グロンギ』…クウガの敵だ」

フィリップと2人でクウガの戦いを見守っていたが、クウガの動きが鈍い。

「お、おいおい。あれじゃやられちゃうぜ！」

「うん…行こう、翔太郎！」

懐からガイアメモリを取りだし、2人で構える。

『CYCLONE!』

『JOKER!』

「変身！」

『CYCLONE・JOKER!!』

フィリップの「風の記憶」が内包されたサイクロンメモリがドライバーのスロットの右にセットされ
俺の「切札の記憶」を内包しているジョーカーメモリを左に差しこむ。

これで俺達は2人で1人の仮面ライダー、Wに変身する。

『翔太郎、クウガが危ない!』

「ちいっ…間に合ええ!」

見ると、グロンギがハンマーをクウガに振り降ろそうとしている所だった。

急いで俺はトリガーメモリを取りだし、ジョーカーメモリと入れ替えた。

トリガーメモリに内包されているのは「銃撃手の記憶」でこれでWは遠距離攻撃が可能になる。

『TRIGGER!』

『CYCLONE・TRIGGER!!』

左胸のトリガーマグナムで風の銃弾を放ちグロンギのハンマーを撃ち落とし、クウガへと駆け寄る。

「よお。大丈夫か、仮面ライダークウガ?」

「えっ、仮面…ライダー? あなたは一体?」

でもクウガはWに驚いているようで、仮面ライダーと言われてもピンと来ていないようだ。

「ん? 忘れちゃったのか、前ディケイドと一緒に戦った時にいた

だろ？」

まるで俺達と初対面のようなクウガの反応。
そう言えば少し声も違うような気がする。

『翔太郎、どうやら彼はクウガではあっても僕たちの知っているクウガじゃないようだ』

「どういう事だ、フィリップ？」

『その話は後だ、今はあのグロンギを倒そう…戦士クウガ、で分かるかい？』

「あ、はい…俺はクウガですけど？」

『僕たちの名前は仮面ラ……Wだ。君に協力しよう、一緒にあのグロンギを倒すんだ』

「ダブルさん…わかりました、よろしくお願いします！」

フィリップが差し出した手を掴み立ちあがったクウガがWの横に並び立つ。

「なんだかわかんねえけど…確かに話は後だな、はっ！」

乱入者に驚いていたグロンギが雄叫びをあげて俺達に向かってきた。突進してきたグロンギにトリガーマグナムを放つ、だが効果は全くない。

「これじゃダメかよ…だったら！」

『HEAT!』

『METAL!』

左右のドライバーからメモリを抜き、両手に新たなメモリを取りだ

し、スロットに入れる。

右手には「熱き記憶」を内包しており、高熱と闘争本能をかきたてるヒートメモリ。

左手には「闘士の記憶」を内包しており、最大の腕力と防御力をもつボディを生み出すメタルメモリだ。

『HEAT・METAL!!』

今の俺達に出来る攻撃力が高いスタイル、ヒートメタルだ。

「す、すごい…何もない所から武器が出てきた」

隣に立つクウガが何か驚いているけど、それに構わずにグロンギに向かって行った。

「ググッ？」

グロンギも少し驚いたようだがすぐに自分の胸元の装飾をハンマーに変化させ殴りかかって来た。
すぐに背中に付いたメタルシャフトを抜いて受け止める。

「ガッ！」

「たあっ！……ぐっ…か、かってえ…」

「フンッ！」

重い打撃に腕がしびれる、続けて放たれたハンマーの打ち上げにシャフトが空へ弾き飛ばされた。

「やべっ！」

「これ借ります、超変身！…おりゃああ！！」

その時背後からクウガが青く変身し、空中に大ジャンプしてメタルシャフトを掴んだ。

するとシャフトはすぐに青い棒へと変化した。

そして、そのままクウガは落下の勢いを乗せた棒をグロンギへと突き刺した。

「ムムッ……」

「やっぱり、ダメか……」

グロンギの体に何か赤い文字が浮かび上がったがすぐに消えてしまった。

「お、おい今何が起きたんだ？」

『クウガは手に持った物質を再構成し、自分の武器に変え、封印のパワーをグロンギに叩きつける力がある。』

だけど、あいつはそれすらも弾いた……単純なパワーしかないけど、すごい強敵だ』

「だな……ファングやエクストリームが使えない俺達じゃきついな……」

今2つの自律型メモリ、フィリップのファングメモリとエクストリームメモリは自然修復中だ。

少し前にとある事件で不意を付かれて破損してしまっ使用不可能。

「……フンっ！」

「うわっ！」

「うおっと！」

グロンギは自分の胸に突き刺さったままの棒を掴み、こちらへとクウガを投げ飛ばしてきた。

「つつつ…クウガ、何か手はないのか？」

「あの未確認生命体は一度倒してるんですけど、その時倒した力が今はちょっと使えなくて…すみません」

それにアイツを倒すと大爆発を起こしてこんな街中じゃ被害が…」
「何っ！？ 参ったなあ、どうするフリーップ？」

『Wとクウガ、2人のライダーの同時攻撃、ツインマキシマムでも倒せるか分からないしね…』

クウガからシャフトを元に戻してから返され、迫りくるグロンギに2人で構える。

今まで沢山のドーパント達を相手にしてきたが、正直一番の強敵かもしれない。

「だったら、ライダーが5人もいれば足りるんじゃないか？」

「ん？…誰だ？」

『その声は…ディケイド！』

後ろから声がかかり、振り向くとそこには3人のライダーがいた。

1人目は声をかけてきたマゼンタに身を包んだ異世界の仮面ライダー、ディケイド。

2人目は隣に立っているライダーと同じライダー…仮面ライダークウガ

「「あ、あれは…クウガ！？」」

隣に立っているクウガとディケイドの隣に立っているクウガが同時に叫んだ。

ま、無理もないか…自分と同じ姿をしたライダーを見たんだからな

『それともう1人は、仮面ライダー…キバ?』

3人目は蝙蝠のような鎧を纏った仮面ライダーキバ。こうもライダーが揃ってくるのは久々だった。だけど、今はそんな疑問を抱いている時じゃなかった。

「そうだ、W。今はあいつをどうにかするのが先だぞ」

「ちっ、人の心を勝手に読むなっの」

『いや、翔太郎は分かりやすいからねえ』

「そんな事言ってる場合じゃないだろ、士!」

「小野寺くんの言う通りですよ、ディケイド」

割り込むように来たグロンギのハンマーを紫色の鎧に包まれ巨大なハンマーを持ったキバが受け止めた。

そして、無防備なグロンギの腹に2人のクウガのパンチが決まる。

「……」

「……」

2人のクウガはじっと見つめ合った後、静かに頷きグロンギと戦い始める。

「それで、どうするんだディケイド、街中で倒したら大爆発を起こすらしいんだぞ?」

「ふっ、だったら爆発を起こしても被害が出ない場所でやればいいだろう?」

そう言ってディケイドは指を上へと向けた…なるほど、ディケイドのやる事がわかったぜ。

スタックフォンを取りだし、ガレージからリボルギヤリーを呼びだ

す。

「ユウスケ！」

「「はいっ！／＼えっ！？」」

キバと共にグロンギに戦っている2人のクウガが同時にディケイドの方を向いた。

…どうやらあのクウガは2人共ユウスケって名前らしいな…

「…ああ、もう…小野寺ユウスケ！ 行くぞ！！」

「ま、まさか士、ちょいきなりかよ！」

ディケイドはカードを1枚取り出し、ベルトへと差しこんだ。

『FINAL FORM RIDE KUUGA!』

音声と共に1人のクウガの姿が黒いクワガタのような機械へと変わった。

「あっ！ ゴ、ゴウラムに変わった！？」

もう1人のクウガが驚いている。

そして、キバのハンマーに殴り飛ばされたグロンギの体を先端に付いた角で挟み

そのまま上空へと跳び上がった。

「おっ、きたな…クウガ、こっちに！」

「えっ…はいっ！」

リボルギャリーが展開すると既に俺達専用バイク、ハードボイルダ

―の後部に空中戦用の
赤いタービュラーユニットが装着されていた。

「乗れよ、クウガ…空中であいつを仕留めるぜ」
「わかりました！」

クウガを乗せ、タービュラーをゴウラムへと向ける。

「俺達もやるぜ、紅渡」
「ええ」

『FINAL FORM RIDE KIVA!』

地上ではディケイドがキバを巨大な弓へと変形させていた。

「しっかりつかまってるよう！」
「はいっ！」

風都が一望できる程の高さまで飛んだゴウラムがグロンギを放り投げた。

『今だっ!』
「はあああ…ふっ…おおくりやああ…!!」

クウガが構えを取ると全身に稲妻が走り黄金のラインが至る所に現れ、右足には金色の足甲が着いた。
そして、空中を落ちてくるグロンギに向けてライダーキックを放った。

「ついでにこれくらっとけ！」

『CYCLONE!』

『TRIGGER!』

『CYCLONE・TRIGGER!!』

タービュラーに乗りながら再びサイクロントリガーに変わり、追撃のマキシマムドライブを発動させた。

『TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!!』

「『トリガーエアロバスター!』」

マグナムから小型の竜巻をグロンギに向けて連続発射した。

『FINAL ATTACK RIDE KIVA!!』

「キバって行くぜ!」

ディケイドがキバの変形した弓を引き、不思議な掛け声と共に光の矢が放たれた。

5人のライダーの力が合わさった攻撃がグロンギに集まり、大爆発を起こした。

「やりました、ダブルさん!」

クウガはゴウラムの背に乗り、こちらに向けて親指を突き出してきた。

「お、おう!」

思わず俺もサムズアップで答える。

これで謎の怪物事件は解決：なんて甘い事をその時の俺は思っていた。

だが、本当はこれが始まりだったんだ。

風都：いや、世界を巻き込んだ真のライダー大戦の：プロローグにしか過ぎなかった。

Side out

旧ミュージアム 秘密研究所

Side 悠也

銃声と共に辺り一面に閃光が走る。

「閃光弾か：なら！」

眼を塞ぎながら懷から円盤型の爆弾を放り投げすぐに柱の後ろに隠れる。

「っ！：避ける！」

兵士の叫び声と共に爆弾が炸裂し、中からいくつもの釘が研究所内に飛び散った。

ガラスや機材の破壊音と共に俺を取り囲もうとしていた兵士や中央の防弾ガラス内にある

ベルトやケースを取ろうとしていた兵士達の叫び声が聞こえる。

敵はかなり今ので減ったのだろうが流石に全滅はしていないだろう。すぐに柱を飛び出し、懷から2丁の大型拳銃を取り出し、構える。

これはこの世界の実在する大型拳銃をフルオート型に改造したものだ。

やはり、十数名の兵士が柱や機材の影からライフルを構えて来ていた。

そちらに向けて銃を撃つ。研究所の入り口付近には近くにいた兵士を盾代わりにして釘爆弾を防いだ白いスーツを着た2人の姿も見えた。

「あの子ネズミ…猫程度にはじゃれついてくるわね…」

「これ以上時間をかけるわけには行きませんか？」

感覚を増大している俺の耳には2人の話し声も聞こえてくる。中央部分ではガラスが割れ、ベルトやケースがむき出しになっていた。

とっさにそちらに銃を一丁向け、乱射をするところそり回収しようとしていた兵士達が倒れる。

「諦めて帰ったらどうだ？」

戦いながらも研究所中央のベルトの前に移動し、ケースと共に回収する。

コート内部にある弾奏に銃をスライドさせて自動装填する。すでに兵士も5人以下になっていた。

「ここまで邪魔をされるとは、尚更ここで死んでもらうわ、後々のためにもね」

「許可する…使え」

男が近くにいた3人の兵士に何かを放り投げた。それはベルトとUSBメモリのようなものだった。

「確か財団はガイアメモリから手を引いたんじゃないのか？」
「良く知ってるな…確かに出費からは手を引いた。だがミュージアムからの提供品にはまだまだ改良の余地があると判断してね、独自に研究はしていたのだよ…これがその成果だ」

『ARMS』

『NAZCA』

『ICEAGE』

3人の兵士はガイアメモリをベルトに差し、それぞれドーパントへと変身した。

「おいおい、こんな場所には不向きなメモリばっかじゃないか、探し物がどうなってもいいのか？」

「…それはどうかしら？」

『CLOCK UP』

「っ!？」

ふと景色が歪み、俺は何者かに殴り飛ばされて、手に持っていたベルトとケースは取られてしまった。

「がはっ! い、今のは…?」

「言っておくけど今の攻撃であなたを簡単に殺せたわ…でも、それじゃダメ、意味がない」

「お前は新型ドライバーの実験相手に相応しそうだからな、ライダーほどではないにしてもな」

2人の財団Xエージェントの手にはさっきまで俺が掴んでいたベルトとジュラルミンケースが握られている。

そして、2人の横にはカブトムシを思わせる角を生やした赤いライダーと

クワガタのような挟み角を生やし両肩に刃が付いている青いライダーの姿があった。

「……っ！ 仮面ライダーカブトにガダック!?」

こうしてまた、風都に新たなライダーが世界を超えて現れた。

しかし、カブトとガダック…2人のライダーはどうやら財団X側に付いているようだ…

続く

第2話 Kとの遭遇／集うライダー達（後書き）

カガヤ

「はい、Kとの遭遇：クウガと見せかけて実はカブトやキバも含まれてましたぁ！」

ゼオン

「そこまで言うような事でもないだろう」

カガヤ

「まーね（笑）：次々と出現するライダー：かき切れるか不安だけど、次回もドンドン増えます！口調がおかしい時は遠慮なく言ってください：五代や士など原作キャラはTVシリーズ終了後設定の原作キャラなんで…」

ゼオン

「特に響鬼とキバに自信ないそうだ：ま、響鬼はまだ出ていないがな」

カガヤ

「次回、やっと主人公がまともな活躍しますよー（笑）」

第3話 Dの衝撃／天と夢と時の守り人（前書き）

敵オ리지ナルライダーの出番近し！

各キャラの呼称に違和感ないか心配な今日この頃…

第3話 Dの衝撃／天と夢と時の守り人

旧ミュージアム 秘密研究所

S i d e 悠也

カブト、ガタツク、そしてドーパント3匹。

こいつらを相手にするには地下研究所は狭すぎた。

それにしてもこいつらを指揮してる男女2人、恐らくは財団Xのエージェントなのだろうが

（変だな、情報ではエージェントはほぼ無表情のはずだが…）

こいつらは表情をまるで隠そうとせずに喜びや驚きを見せている。

「ま、そんな事より……一旦、外に出るか」

袖口から丸い物体をいくつか奴らに向けて投げつける。

ドーパントが撃ち落とそうとしたが、それより先に爆弾が炸裂した。閃光と爆音と爆煙の3種類、手持ちの全てを使って奴らを一旦怯ませ、外へと飛び出す。

仮面ライダーとドーパントをこんなもので目くらましにもならないとは思ったが

実はさっき、緊急避難口を見つけていたので、そこから出た。

「…小細工を…追え！」

後ろからあの女の叫び声が聞こえる、やはりただのエージェントではないようだ…

旧園崎家 屋外

廃墟とかした園崎家を翔け、一先ず開けた庭園まで来た所で囲まれた。

「……ここまでだ、よく持ちこたえたな褒めてやろう」

ナスカドーパントが三流の雑魚が言うセリフを吐いてきた。

「俺もお前らを褒めてやるよ…俺1人なんかライダー2人にドーパント3匹なんて強大過ぎる戦力を

向けてきた事をな」

「…何？」

「ここいる誰よりも…俺は強いから、なっ！」

両手を交差させ、精神を集中する。腰にベルトが浮かび上がる…一度呼吸を整え…

「な、そのベルト…まさか貴様は！？」

「変身！」

ベルトから光が全身を包み込み、俺の体をデュエルへと変化させる。うん、初めてだったがうまく変身出来たな。

「貴様も仮面ライダーだったか…」

「仮面ライダー？ そいつは違うな…俺の名は、デュエルだ！」

そう言いながら近くにいたビーストドーパントを殴り飛ばす。

するとアイスエイジが氷の風を吹かしてきたのでジャンプしてかわし、そのまま回し蹴りを放つ。

カブトがクナイガンをも、ガダックが両肩のキャリバーをも、ナスカが剣を構え向かってくる。

「デュエルセイバー、デュエルガン…はっ！」

左腰に付いている柄を左逆手で持ち、日本刀のような刃を出し、ナスカの剣を防ぐ。

同時に右腰に付いた、デュエルガンをバルカンモードでカブトとガダックに放った。

「があ！」

「ふっ！」

背後からビーストが飛びかかって来たので後ろ蹴りで迎撃する。

ナスカが一旦距離を取り、カブトとガダックと並んだ、どうやらクロックアップと超加速を使う気だ。

「だったら…これだ！」

『THUNDER CHARGE』

ベルトから無機質な声が響き、5つのクリスタルが全て黄色に代わり、全身に黄色の装甲が付いた、

超高速戦闘用形態、サンダーフォーム。

左手に握られたセイバーの刃がナイフ状に代わり、ベルトからコアクリスタルを外し柄にはめる。

『CLOCK UP』

『CLOCK UP』

「超加速！」

「ギガレイダー！」

4人同時に超高速の世界へと入り混む、まずは比較的速度の遅いナスカに狙いを定めた。

本来ならクロックアップよりもかなり速く動けるはずがまだ慣れていない為か少し速い程度だ。

カブトとガタツクをデュエルガンのランチャーモードで弾き飛ばし、その隙にナスカに接近する。

ナスカも高速移動中だが、俺から見ればかなり遅い…セイバーを逆手に持ち全身を切り刻む。

よろける暇も与えずにナスカのドライバーにセイバーを突き立て、柄のクリスタルが一層輝きを増し

刃から電撃がほとばしり、ナスカの全身を駆け巡る。

『CLOCK OVER』

『CLOCK OVER』

カブトとガタツクのクロックアップが切れたと同時に俺の超高速も切れた。

俺の足元には壊れたナスカメモリとドライバーと気絶した財団の兵士が倒れている。

何か名前付けた方がいいかな、この高速移動…

「っ!？」

アイスエイジの冷氣が襲いかかり、その場を跳び退ける。
しまった…兵士が氷漬けにされてしまった。

しかし、次の瞬間、ビーストが氷漬けの兵士を踏みつけ粉々に碎いてしまった。

「……………情報の漏洩防止か？」

「…当然」

実際、こう言うのは見慣れている、動けない兵士は敵に情報を与えるだけのお荷物だ。

理に適ってると言える…だが、見慣れてはいても…

「氣にくわねえ」

ビーストに蹴りを放つ、が、ヒラリと避けられる。それも計算済み。勢いをそのままに逆手にもったセイバーでビーストを薙ぎ払う。

見るからに深い傷が胸元に走る、追撃を放とうとしたがカブトとアイスエイジの遠距離攻撃に阻まれた。

そのまま迫って来たガタツクの攻撃を受け止める。

首を狙った斬撃をセイバーでいなし、ガタツクは腹部を狙った銃撃を体を逸らしてかわす。

すぐにカブトやビーストもその攻撃に加わる。

ビーストの胸元に出来た傷はすでに塞がっていた。

（ビーストを倒すには…この形態じゃ厳しい、ん！？…あの首に付いているのは…）

ふと組み合っているガタツクの首に目がいった。

細くて遠くからだと見えなかったが何か首輪のようなものが付いていた。

「…あれか！ ギガレイダー！」

今度はガタックやカブトよりも速く超高速の世界に入る事が出来た。
いかにクロックアップでも先に発動した方が速く動ける。

ガタックの首を狙いセイバーを横に振う…狙いはバッチリだ。

首を傷つけずにガタックの首輪だけを斬り落とす事に成功した。

ゆっくり崩れ落ちるガタックを背負いその場を一時離れる。

クロックアップ中ではないカブトや超高速を察知する能力のないピーストやアイスエイジでは探知出来ない。

「おい…おい、起きろ」

ガタックの変身が解け、気のよさそうなスーツを着た青年の姿になった。

「こいつは確か……加賀美^{かがみ} 新ガタックの装着者^{あらた}」

別の装着者という事も考えていたが、『原典の世界』のガタック装着者である加賀美だった。

と言う事はカブトも『原典の世界』のカブト…でいいのか？

「ぐっ…て…んどう…っ、天道！？」

突然加賀美が跳ね起きた、が、ダメージがまだ残っているのかすぐに倒れ込む。

「い、つつ…ここは……お前は！？」

まだ変身中だった為に警戒されたようだ、仕方ないまだ戦闘中なの

だから変身を解くわけにもいかない。

「俺の名はデュエル：相良悠也だ。加賀美新、お前の事は知っている。だが、俺は敵じゃない」

「相良：悠也？　なんで俺を知っているだ？　俺は一体どうした：あ、天道！：そうだ天道だ！」

また起き上がりとしたので押さえつけて、気持ちいを落ち着かせる。

「落ち着け、後で全部話す。が、天道とはカブトの事か？」

「あ、ああ、そうだ：俺の友達……って言うのか戦友というのか、とにかく天道が誰かに捕まったんだ！」

加賀美が言うには、ある日ワームを倒した直後に突然光に飲みこまれて気が付くと見知らぬ場所にいて辺りを散策していた所、謎の集団に囲まれて囚われたカブトを人質に取られて変な首輪を付けられた：と、こういう事だ。

「：なるほど、お前やカブトはこの首輪で操られてるってわけか」

切り裂いた首輪の一部を加賀美に見せながら呟く、と向こうからカブト達が追ってきた。

「て、天道！」

木に手を乗せ、どうにか加賀美が立ちあがりゆっくりとこちらに来るカブトに声をかけた。だが、反応はない。

「ダメだ、今のカブトにお前の声は届いていない…」
「そんな…くそっ、こうなったら…うぐっ」

ガタツクゼクターで再度変身しようとしたがまた崩れ落ちてしまった。

体を支え、ゆっくりと木によしかかるように座らせた。

「無茶をするな、ここは俺に任せろ…」

「ぐっ…た、頼む…あいつを…天道を…」

腕にしがみ付きながら加賀美は俺に懇願してきた、すると…

「誰を頼むと言うのだ、加賀美？」

「…誰だ!？」

バイクの音が2台分聞こえ、人の声も聞こえてきた。

「おばあちゃんが言っていた…例え姿は違っても真の絆があれば、仲間の見分けがつく…とな」

「…その声は…まさか!」

「加賀美、お前は俺が分からなかったのか？」

声のする方へ顔を向けると2人の男が奇妙なバイクから降りこちらに歩いてきていた。

2人はゆっくりとヘルメットを脱ぐと不敵な笑みを浮かべた。

「天道!!」

「…天道総司そうじそれにもう1人は…」

「おい、天道…お前にもあんなに友達想いな奴がいたんだな」

「ふっ、その言葉そっくりお前に返すぞ、乾」

2人は皮肉を言いながらもまるで悪友同士のような振る舞いだ。

「乾^{いぬい}巧^{たくみ}…仮面ライダー、555…」

「あっ？ 誰だ、お前？ なんで555の事まで知ってんだ？」

「俺の事も知っているようだな…何者だ？」

2人が俺に不審の目を向けてくる、ライダーの中でもこの2人は特に用心深いからな。

「…デュエル。お前達がこの世界にやってきた黒幕を知っている…とだけ今は言っておく」

そう言って視線を天道達からカブト達へと向ける。

突然の乱入者にビーストとアイスエイジは顔を見合わせていたがすぐに構えてきた。

「ほう、やはりここは別の世界だったか…」

「信じられねえ…けど、天道の言った通りだったってわけか」

天道と乾はそれぞれベルトを付け、カブトゼクターとファイズフォンを手にした。

「ま、ひとまずは…あいつらを片付けるか、どうやら俺達を襲う気らしいしな」

「同感だ…何より、カブトは俺1人でいい、あいつと違ってカラーも同じとは、悪趣味だ」

2人はそれぞれポーズを取り…

「…変身」

『HENSHIN』

天道のベルトにカブトゼクターが装着され、機械音声と共に全身を銀と赤の装甲が覆った。

仮面ライダーカブト・マスクドフォーム…

『STANDING BY』

「変身！」

『COMPLETE』

ファイズフォンに「555」と変身コードを打ち込みベルトに装着すると巧の体に赤いラインが走り
仮面ライダー555へと変身した。

「ラ、ライダーシステム？」

「仮面ライダー！！」

加賀美は555に驚き、ドーパント達は忌々しげに戦士の名を叫んだ。

「キャストオフ」

『CAST OFF』

それを気にも留めずに天道はゼクターのスイッチを押し、全身のアーマーをパージした。

そして、近くにいた555と俺に多数のアーマーが弾丸のように飛んできた。

『CHANGE BEETLE』

「う、うわっ!？　だからお前それ近くでやんっての!」

「お前が良ければいいだけだ…その男のようにな」

「…お前、アレ全部避けたのか?」

「まあな…」

555の視線はカブトから俺へと向けられた。

俺はこの事は予測できていたし、サンダーフォームなら尚更かわすのは簡単だ。

「そんな事より…くるぞ」

天道カブトの言葉に俺と555はセイバーと拳を構え…駆けだした。俺と天道カブトと555、ビーストとアイスエイジと謎のカブト…両者が激突するまさにその瞬間。

突然巨大な雷が落ち、衝撃波に全員が吹き飛ばされてしまった。

「ぐあっ!?!」

「なんだ!?!」

「ちい!」

「っ!?!」

素早く立ちあがり、土煙の中を見る…誰か、数人の人影が見える。

「いってえー!!…って、おい手羽先野郎!　降りろ!」

「わが身を犠牲にして私を助けるとは、家臣ながらあっぱれだ」

「…お、重い…2人共、どいてえー」

1人の青年の上に乗る赤い鬼と白い鳥の怪人の姿…今度は一体だれ

だ。

「なんだあ？　また変なのが現れたぞ？」

「あれは…俺がこの世界に來た時と同じ光だ…」

「あ、俺もだ！　雷に打たれたような光だった！」

天道や巧も訝しげに3人（？）を見ていた。

どうやら、あの雷の光で各世界のライダー達は風都に飛ばされてきたようだ。

そして、また新たなライダーがこの風都に呼び出された。

今現れた青年の名は野上良太郎

のがみ りょうたろう

赤い鬼はイマジンのモモタロス。

白い鳥はイマジンのジーク。

彼らは仮面ライダー電王に変身し時の運行を守るライダー達だ。

そして、その時は気付かなかったが、遠くからあの2人エージェン
トが俺達の様子を窺っていた。

手元には回収したジュラルミンケースの中から取り出したガイアメ
モリとドライバーが握られている。

「今度は仮面ライダー電王…ふふっ、彼らだけじゃ無理ね。なら
ばさっそく使ってみましようか」

「ミュージアムの遺産…デュアルドライバーを、ですか？」

「そうよ…仮面ライダーには仮面ライダー…仮面ライダーデュア
ルの力、試してみましよう」

不敵に笑う女エージェントの視線は得物を狩る肉食動物のようにぎ
らついていた。

続く

第3話 Dの衝撃／天と夢と時の守り人（後書き）

カガヤ

「ドンドン出てくるライダー達！」

ゼオン

「ユウスケ以外は原典のライダーばかりだな…あのカブトは違うようだが」

カガヤ

「まー天道が簡単に捕まるわけないんで…あのカブトはもう誰か察しがつくと思います（笑）」

ゼオン

「そして、敵にもライダーの気配…デュアル、デュエルと似ていないか？」

カガヤ

「似てるからこそいいんだよ…さって、書くのが楽しくて止まらない♪」

ゼオン

「なのは異伝もがんばれよ…」

カガヤ

「はい（汗）」

第4話 Dの衝撃／合戦、混戦、大乱戦（前書き）

サブタイトルをどうしようか悩み中
ずっとWっぽいので行こうかな…

第4話 Dの衝撃／合戦、混戦、大乱戦

Side 良太郎

いつ、たたた……全く、ジークもモモタロスも早く下りてほしいよ
お……ってあれ？ ここ……どこ？

ある日突然僕の姿が子供から元に戻ったかと思えば、モモタロス達
が来てデンライナーの中で
確かオーナーさんに

『時空の乱れ、世界の乱れ、そして、危機が迫っていますう……！』

と言われて幸太郎や侑斗と一緒に行動を開始しようとしたんだけど、
突然デンライナーに雷が落ちて
気が付いたら……

「ここ……どこ？」

「あん？ なんだここ……っていうか、仮面ライダーカブトに555
に変な奴がいるじゃねえか！」

モモタロスが指差す方を見ると、確か少し前にスーパーショッカー
と戦った時にいたライダーがいて
その中で見慣れない白と黄色と黒の……ライダー？ 分からない人
がいた。

「おい、仮面ライダー電王！ 詳しい話は後だ、早く変身しろっ！」
「変身……ってうおお……！？」

見かけない獣のような怪人がいきなり襲いかかってきて、モモタロ

スが剣を取りだしてなんとか防いだけど
なんでいきなり攻撃されるのかな？ イマジンには見えないけど？

「電王：捕獲する！」

「なにいろ？ 捕獲だあ？ 良太郎なんだかわかんねえけど、とり
あえず変身だ！」

「う、うん！」

モモタロスの言葉に頷いてライダーパスとデンオウベルトを取りだ
して：

「ならば、私が変身しよう…ふむっ」

「えっ、ジーク？…ちょっ！……変身」

『W I N G F O R M』

憑依しようとしたモモタロスを押しのけてジークが割り込んできた。
ジークは気紛れだから…

そして、変身。全身をオーラアーマーが覆って白鳥のような仮面が
僕の顔に着く。

これが電王のウイングフォーム。

「降臨、満を持して！」

「こら何しやがんだ！！！」

ポーズを決めた電王を後ろからモモタロスが小突く…ちょっと痛い
よ、モモタロス。

「何、最近あまり活躍していないからな、私の勇姿を皆も心待ちに
しているだろう？」

「してねえよ！……うおっ！？」

そんなやりとりをしていると今度は水色の全身に羽毛みたいなのがついた怪人が襲いかかって来た。

今度はホタルのような人が助けてくれた。

「おい、お前、戦うんならちゃんとしろ！」

『は、はい：すみません』

「うむ、よき働きだぞ」

『ジ、ジーク！』

「ん？　なんで声が2つ聞こえてくるんだ？：まあいい、そいつ頼んだぜ」

確か、555？　だったかな。その人が訝しげにこっちを見てくる。やっぱり変だよ、イメージを良く知らない人からみたら、あははは：：

気持ちを切り替えて、羽の着いた怪人と戦う。

「ん？　イメージのにおい？：：うわっ、こ、今度はなんだ！？」

突然モモタロスが辺りを見渡したかと思うと、大きい雷が落ちて来た。

「またあの雷かよ：」

「何やら見覚えのある雷だな」

「お前らが現れた時もあの雷が落ちてきたんだよ」

って事は、僕たちはあの雷のせいでここに飛ばされてきたのかな：

「あれゝ白い電王だあ、おかしいな：今さっき紫の奴倒したばかりなのに」

「ふんっ、なんであれ構わん、電王ならば…叩き潰す！」

雷が晴れて出てきたのは、以前にリュウタロスを倒した程の強敵、アリとギリギリスのイマジンだった。

Side out

Side 悠也

天道カブトと一緒にもう1人のカブトと戦っていた俺は雷に気付き、急いでアークのゼオンに連絡した。

『ゼオン、今の雷もちゃんと補足できたか』

『ああ、電王が現れた時と全く同じ雷だ…しかも、今度はイマジンが現れたぞ』

『なるほど…』

「悪い、天道…あっちの方が危なくなってきたからここ、任せていいか？」

「最初から俺一人で大丈夫だと言ったはずだ…構わん」

「ふっ、任せたぜ…」

急いで電王に襲いかかるイマジンの方へと向かった俺だが、途中でビーストドーパントに阻まれた。

「デュエル…財団の邪魔者」

「…仕方ない」

確かこいつはエクストリームじゃなきゃ何度でも再生するからな…

俺が適任だろう。

向こうでは電王ウイングフォームとモモタロスがイマジン2人組と戦っている。

アイスエイジは555が相手をしているが冷氣に苦戦しているようだ。

『CHARGE OUT』

スタンダードフォームに戻り、セイバーとガンを構える。

「行くぜ、たああ！」

右のセイバーを爪で防がれ、バルカンを身を僅かにずらす事で交わされる。

それでも追撃を止めない、下段に放った回し蹴りを跳ぶ事でかわされたなら、セイバーで斬りあげる。

「龍翔閃！」

「ぐっ…」

かわしきれずに胸元に大きな傷を作った、だがこれではまだだ。傷口にガンをランチャーにして押し当てる。

「やめっ…!?!」

「止めるかよ！」

続けざまに数発撃ち込む、傷口が広がりビーストは大きくのけ反り吹き飛ばされる。

「はああ………デュエルキック！」

コアクリスタルが白い閃光を放ち、俺は構えを取り、ビーストへと飛び蹴りを放った。

右足に集まった閃光の渦はビーストを捉えた。

「ぐががつ…さ、再生しな…い？…ぐああゝ！！！」

「デュエルの能力の1つ…特殊能力の無効化、さ」

大爆発と共にビーストのガイアメモリが碎かれ宙を舞った。
後に残ったのは、気絶した兵士のみ…555の方を見ると

『COMPLETE』

アクセルメモリーをファイズフォンにセットしアクセルフォームになって冷気をかわす戦法のようなだ。

左右の胸部アーマーが肩口まで展開し、複眼が赤くなり、アクセルフォームへと変身した。

さらに右足にファイズポインターをセットし、左手に付けられたファイズアクセルのボタンを押す。

『START UP』

555はクロックアップ並の超高速の世界に突入し、突然消えた555に驚くアイスエイジの周囲に

5つの円錐状の赤い光を発生させ、必殺のアクセルクリムゾンスマッシュを放った。

「はあっ！やあ！たあ！！！」

「ぐぶっ、がつ、なっ…うわああ！！！」

連続して円錐状の光がアイスエイジに突き刺さり、大爆発を起こす。メモリブレイク出来るか少し不安だったが、大丈夫だったようだ、倒れた兵士の側にメモリが落ちていた。

「俺の必殺技 モモタロスバージョン！」

『FULL CHARGE』

電王の方もイメージン2体を倒した所だった、確かアレは以前電王とゼロノスが苦戦した相手だったはず

2回目だからかな…それにしてもあいつら気になる事言っていたな。

「紫の奴倒したばかりなのに」

ひよっとしてあいつらは…

「ぐっ！」

カブトの方を見るともう1人のカブトと激しく戦っている最中だった。

クロックアップを駆使してお互い一進一退の攻防を繰り返している。天道ならば同じ相手でも苦戦しないと思ったが…相当な使い手らしい、ひよっとして天童ソウジか？

「…ハイパーゼクターは使えないか…」

どうやらハイパーゼクターはこの世界には呼べないらしい、ハイパーカブトにはなれないのか…

「おい、苦戦しているなら手を貸すぜ」

「暴れ足りないからなあ！」

555と大剣を肩に担いだモモタロスが天道カブトの隣に立つ。

「ふむっ、私は少々疲れた」

「天道、俺ももう大丈夫…だ」

W電王と加賀美もやってきて、変身の体勢に入る。

「あらあら、せっかくのガイアメモリが3本無駄になったわね」

敵カブトの後ろからあの女エージェントが現れた。

腰には研究所で見かけたあのベルトが巻かれている。

よく見るとWのベルトに似ているがあっちはスロットが2つだが、このベルトにはスロットが3つある。

「なんだ、お前は？」

「なんだか胡散臭い奴だな…」

天道カブトと555が話しかけるが、エージェントはそれを無視し、電王と俺に目を向けた。

「その2人、捕獲するわ…電王、野上良太郎に謎のライダー、デユエル」

妖しげに指を動かし俺と電王というより良太郎を指さす仕草に嫌悪感を覚える。

「あいにくだな、それをさせない為に俺がここにいるんだ」

「ふむ、私を無視して捕獲などと…無礼な！」

『ジーク、気を付けて…あの人普通じゃないよ』

女エージェントは唇を釣り上げ舌で舐め上げゆっくりと一本のガイアメモリを取りだした。

『DUAL』

そして、ベルトの真ん中のスロットにメモリを差しこんだ。するとメモリから紐のような光が全身を包みこみ黒と白のラインが走ったような仮面ライダーの姿がそこにあった。一見すると黒いWのような姿だが、頭部のアンテナと胸に現れた大きな水晶が違う。

「私はデュアル…仮面ライダーデュアル」

デュアルは更に2本のメモリを取りだし左右のスロットに入れた。

『ARMS』

『BOMB』

『FUSION DRIVE』

メモリを差しこむとドライバーから音声が聞こえ、メモリから胸元のクリスタルへと光が流れた。

「…フュージョン？」

「加賀美、早く変身しろ!!」

「くっ…変身!」

焦りったような天道の声に加賀美は慌ててガタツクゼクターを構え変身した。

…何か嫌な予感がする。

『HENSIN』
『PUT ON』

ガタックがマスクドフォームに変身し、カブトがアーマーを着込み
マスクドフォームになると同時に

「じゃあ、死になさい」

デュアルの両手に大型のガトリングが現れ一斉に火を吹いた。

「うわああゝ！」

「ぐううゝ！！！」

銃弾一発一発が爆弾であるかのような連続して大爆発を起こし
俺達の前に守るように立ったカブトとガタックが一瞬で吹き飛ばさ
れ、変身を解除された。

そして、俺達も爆風の余波で大きく吹き飛ばされた。

「あぐっ…な、なんだったんだ今のは…」

555がフラフラと力なく立ちあがる。

電王とモモタロスの方は気絶しているのか倒れたまま動かない。

俺も直撃はしていないが、結構食らった。

「驚いた？ 異世界のあなたには分からないでしょうけど…そっち
のデュエルは分かったわよね？」

「ああ、ボムメモリの爆発力を乗せたアームズメモリの重火器…だ
ろ？」

「正解♪ ご褒美と冥土の土産に何か質問があれば、答えてもいい

わよ？」

余裕の声をしてくるデュアル。

確かに今の状況はやばいな…まともに戦えるのは多分俺と555だけだ。

「それじゃ1つだけ：俺や電王は捕えるつもりでも、ここにいる555やカブトは殺す気だな？」

隣にいる555が息を飲む、が、これだけは聞かなければいけない：

「…正解、そこまで予測付くならあなたはやはりここで……ぐっ、ぐぐっ…な、何！？」

突然お腹を押さえたかと思うと倒れ込み、変身が解けてしまった。メモリが刺さったままのドライバーが落ち、火花を散らしている。

「…まだ微調整が必要なようですね、仕方ありません。今回は引きますよ」

もう1人のエージェントが抱きかかえるようにしてその場から立ち去ろうとした。

「待て！」

「逃がすかつ！」

俺と555はそれぞれの銃を構えるがそれよりも先にカブトがクロックアップで2人を抱えて去ってしまった。

今の俺には追う力はあまり残っていなかった。

（あいつらデュアルの力を使いこなせていないか…俺も、少し調整必要だな）

変身系の能力は体になじむのに時間がかかる。

アークでは微調整は出来ないので実際に『世界』に飛んでから色々微調整をしなければならない

「…どうやら逃げたみたいだな」

「ああ…一先ず皆の手当てをしないと」

変身を解き、同じく変身を解いた乾と2人して天道やイマジン達の方へと駆け寄る。

（仮面ライダー、デュアル…早くディケイドや他のライダーと合流しなければ）

S i d e o u t

風都 市街地外れ

S i d e 竜

署員からの連絡で俺、照井竜は現場へと駆けつけた。

途中、無線で鬼がどうかバケネコがどうかという情報も流れたが一先ずは最初に連絡があった

サソリの怪人へと向かう。速く片付けて他の場所へ行かねば…

そして、現場に着いた俺が見たものは

「……あれか…ん？ あれは、ドーパント!？」

マグマドーパントとマネードーパントを一方的に蹂躪する盾と手斧
を持った赤いサソリの怪人だった。

続く

第4話 Dの衝撃／合戦、混戦、大乱戦（後書き）

カガヤ

「はい、4話終了！デュエル…なんか力不足？」

ゼオン

「作者の力不足だろ…」

カガヤ

「うぐっ…最初から無双にしたらつまらないでしょ！いいんです、これからどんどん強くなるんだから」

ゼオン

「それと終わり方が毎回似ていないか？」

カガヤ

「それは…区切り方が悪いと言うか…半分わざと、ライダーが全員合流するまではこういう感じにどうしてもなっちゃうんですよ（汗）」

ゼオン

「精進しろ」

カガヤ

「がんばります（汗）ところどころ伏線張ってますけど…次回と次の次で大まかなライダーは出ます、多分」

第5話 Aの邂逅／3人の刑事（前書き）

ドンドン出てくる異世界のライダー達！

第5話 Aの邂逅／3人の刑事

S i d e 悠也

財団Xの女エージェント、デュアルとの戦いを終え、俺はカブトや電王達の治療を行った。

全員が軽傷だったため俺の軟気功ですぐに怪我は治ったのが幸いだ。

「こんな事まで出来るとは…お前、何者だ？」

天道が治った腕をさすりながら怪訝な顔をして聞いてきた。

「俺の名は相良悠也、色々説明しなければならない事があるけど…まだ他にも話さなければならぬ

相手が沢山いるからそいつらと合流してから詳しい話をするが、簡単な事だけ言うぞ。

気付いていると思うが、ここはお前達がいた世界ではない…」

そうして、俺は簡単な説明をした。

この街の名が風都で、W、アクセルという仮面ライダーがいる事。仮面ライダーと呼ばれる存在がいる世界が沢山あるという事

これは、電王はディケイドとの接触で仕組みなどが分かっていたのですぐに納得したが

乾や天道は少し驚いていた、彼らは原典の世界から来たから知らないのは当たり前か。

そして、この世界に飛ばされた原因が財団Xの何らかの実験にあると言う事。

「ところで野上、他のイマジン達は？」

「あ、ごめんなさい…実は…」

野上の話では突然光に包まれ気が付いたらモモタロスとジークだけいたとか…厄介だな。

「ウラタロス達とも繋がらなくて…この世界にいるのかどうかも」
「あいつらなら心配いらねえよ、どうせひょっこり現れるって」

モモタロスが明るく言うが、どこか心配しているような口ぶりだ。
モモタロスとジークについてとイマジンについては俺から天道達に説明してある。

でなければ敵と思って攻撃しそうだからな…天道に乾なら大丈夫か？

「とりあえず、この世界にいる仮面ライダー…Wだったか？ そいつの所行くんだろ？」

「そうだな、敵の戦力や目的が一切分からない以上ここに留まるより、合流した方がいいだろう」

「珍しいな、天道がそういう事を言うなんて…」

「今回の件は流石に俺1人でカタがつきそうにないからな」

流石は天道、もう今回の一件の重要性や敵の恐ろしさが分かっているみたいだな。

乾に加賀美、電王組もそれに同意し、鳴海探偵事務所を目指す事になった。

余談だが、乾、天道、加賀美は専用バイクごとこの世界に来ていたが電王はバイクであるマシンデンバードがデンライナーと一緒に行方不明な為と

モモタロス達をそのまま実体化はさせれないので予め近くに転送しておいた

俺の専用バイク・ゼブラチェイサーにジークが憑依した野上を乗せ
じゃんけんで負けた加賀美にモモタロスが無理やり憑依させる事
になった。

それにしても：あの女エージェント、名前も分からなかったが：何
か違和感があった。

財団X：投資対象から外したはずのガイアメモリとNEVERを未
だに研究していた。

ドーパントに変身していた兵士達は実はNEVERであったようだ。
俺と555に倒された兵士は、あの後に消滅してしまってたからだ。
それもあの女エージェントの指揮下の元での研究のようだ：

いや、それ以外にも違和感があった。

女エージェントの存在そのものに違和感を感じた：今度会った時に
確かめなければ。

S i d e o u t

風都 市街地外れ

S i d e 竜

俺は今日の前の光景にあ然としている。

明らかにドーパントとは違う怪人が、ドーパントを2匹も相手にし
て完全に押していた。

メモリの力も弱くまた中身も弱いのかそれほど脅威に感じないドー
パント達だったが

それを差し引いても圧倒的、と言う言葉が似合っている。

しかし、ただ黙って見ているわけにもいかない。

と、沢山の人が倒れている中にまだ気を失っていない警官を見つけ、簡単に事情を聞く事にした。

「おい、一体何があった？」

「じ、自分はパトロール中にあの怪人が雷と共に現れるのを見て、そして、近くにいた2人の少年に

襲いかかったら…ドーパントに変身して…」

「なるほど…」

ドーパント達はたまたまあの怪人が出現した側にいたというわけか…運がない。

どちらにしても…

「ほおつてはおけないな」

『ACCEL!』

「変…身！」

腰に付けたアクセルドライバーにアクセルメモリを差しこみ、ドライバー横のグリップを捻る。

遅いエンジン音と共に俺の体を赤い鋼のボディが包み込み仮面ライダーアクセルへと変身した。

「うわあああゝ!!」

「あぐっ…ああ…」

ドーパント達が怪人の攻撃に倒れ、元の姿に戻りガイアメモリが排出され砕けてしまった。

更に怪人が元に戻った少年に手斧を振りかざす、気絶している2人になすすべはない。

「待てっ！」

エンジンブレードを突きだし間一髪その攻撃を防ぐ事が出来た。くっ…かなり重い一撃だ。どうにかこの少年を病院へ運ばなければ！

バキュンバキュン！…その時、銃声がして、怪人の後頭部に数発当たった。

ダメージはないようだが、一瞬だけ怯みその隙にブレードに力を籠め怪人を突き飛ばした。

「大丈夫ですか!？」

どこからか拳銃を構えたコートの男が現れ、駆け寄って来た。

「私は警視庁の氷川誠ひかわ まことと言います…それは、新しいGユニットですか？

あ、この少年達は私が安全な場所に運びますから、あのアンノウンの足どめお願いします」

「Gユニット?…アンノウン??…よくわからないが、頼んだ」

突然現れた男は手帳を自分に見せて、少年を抱えてこの場から離れた。

言っている事はよくわからなかったが、見せられた手帳は本物だったのだよその警官だろう。

「それよりも…こいつの始末が先だな」

『ENGINE!』

ブレードの刀身を押し下げ、エンジンメモリを取りだし、スロット

へと差しこむ。

これでエンジンブレードは3つの力が使えるようになる、使うのはそのうちの1つ！

『JET!』

ブレードの切っ先からエネルギー弾を発射する、ジェット。これを怪人に向けて放った、だが

「……」

「なにっ!？」

怪人は盾で軽々と防いでしまった。

更に連続して放つがどこを狙っても全て盾で防がれてしまう。

「ならば、これだ！」

『ELECTRIC!』

刀身に電撃を纏う、エレクトリック。これで直接叩き斬る！

「はっ…たぁ！」

袈裟斬りからの連続攻撃。これも手斧と盾で防がれてしまった。

「ぐっ!…ぐはっ!？」

同時に反撃を喰らい体中から火花が散る。それでも倒れずに反撃へと移る。

しかし、こちらの攻撃は全て防がれ、逆に向こうは手斧と盾を巧妙に使い攻撃してくる。

段々と押され始めてきた、ドーパントとは違う能力ではなく純粹な力で押されている。

「こうなれば！」

トライアルメモリを取りだし、エンジンドライバーに差しこもうとしたその時

「シュッ！」

怪人が投げ飛ばしてきた手斧がトライアルメモリを弾き飛ばしてしまった。

取りに行こうと駆けだすと同時に蹴り飛ばされる。

「味な真似を…」

「シュー…」

ブレードを構え怪人と間合いを取る…あの盾をどうにかしなければ埒が明かない。

「盾ごと…打ち砕く！」

『ENGINE ! MAXIMUM DRIVE !』

ブレードのグリップを握りしめ、マキシマムドライブを発動させる。奴の手斧がない今のうちに…倒す！

「はああ…たああ！」

A字型に怪人を盾ごと斬り付ける、これが俺の必殺の技だ…だが、それでも…

「…シッ！」

「な、何！？…あぐっ！」

盾には傷1つ付けられなかった、逆に背中に強い衝撃が伝わる、手斧が円を描いて戻って来たのだ。崩れ落ちる俺の首を怪人がもちあげる

「危ないっ！ そいつの頭の尾に刺されないでください！…くそっ、弾切れか！」

少し離れた場所で先程の刑事が大声で叫んでいた。先程の少年はどうやら駆け付けた救急車で運ばれたようだ。それよりも…こいつの尾、頭の後ろでせり上がって来たアレか！

「ぐっ…はな…せっ！」

しかし、がっちりと首を絞められ、ブレードも先程手放してしまいどうしようも出来なかった。

ファンファンファン…サイレンの音が聞こえてきた…応援だろうか？…妙なサイレンだ。

「こ、このサイレンは…まさか！？」

あの刑事がどこかを見ながら何かを叫んでいたが、俺はこいつの手を離そうとするのに手一杯だった。

怪人の尾が俺の首筋に狙いを定めてきた…くそっ。

ババキュン、先程よりも重い銃声が聞こえ、首を狙っていた尾が途中からちぎれ落ちた。

締めつける手が緩み、俺は怪人の腹を蹴飛ばし、反動で距離を取った。

更に激しい銃声が鳴り響き、怪人が盾を構え後ろへと下がった。

そして、俺の隣には全身を青い機械的なアーマーで身を包んだ…仮面ライダー？が立っていた。

「大丈夫か？…警視庁未確認対策班所属G3-X装着員の芦河シヨウイチだ」
あしかわ

「G3-X！？なんでここに！？」

「未確認対策班？ G3-X？…俺は風都警察署超常犯罪捜査課の照井竜…仮面ライダーアクセル」

「風都？…仮面ライダー、アクセル」

後ろであの刑事が叫んでいたが無視して俺も自分の名を明かしたが。

話が噛みあわない、だが仮面ライダーと言う言葉に反応したと言う事はこれも仮面ライダーなのだろう。

「どうやら、話が合わないが…今はあのアンノウンを倒すのに協力してくれ、照井刑事」

「アンノウンというのかあの怪人は…分かった、行こう、芦河刑事」

芦河、いや、G3-Xという名の仮面ライダーが再度アンノウンに向けて銃撃を放った。

アンノウンは盾でそれを防ぐが、その隙に俺は飛ばされたエンジンブレードを手に取り斬り付けた。

それを手斧で防ぎ、逆に斬りつけてくる。反対側からG3-Xがナイフを手に斬りかかる。

アンノウンは器用に手斧でブレードを防いだかと思えば、器用に裁きG3-Xへと体勢を崩してくる。

ひるまずにG3-Xはアンノウンに組みかかるように突進し

「ここだ！」

盾の裏側に右手に握ったサブマシンガンを押し当て引き金を引いた。

「……シュー！」

アンノウンは少しひるんだけですぐに盾でG3-Xを押し戻し手斧で激しく斬り付ける。

「くそっ…これじゃ火力が足りない、それなら…」

「いや、火力があってもあの盾が邪魔でこっちの攻撃が通らない！」

2対1なのに明らかにこちらの形勢が不利だった、せめてあの盾を使えなくすれば…

「1つ聞く…その銃よりも強い火力を持っているのか？ そのサブマシンガンよりも強力なライフルとかを」

G3-Xが乗って来たバイクには後部座席に折り畳み式の何か重火器のようなものが見えたからだ。

「ある、ライフルどころか、ガトリングにグレネードランチャーがな」

仮面の下で芦河刑事がニヤリと笑った気がした、ならこっちも仮面の下で笑い返そう。

「そいつであいつの動きを止めてくれ…その隙に俺が一気に叩く！」

視線の先にはアンノウンの後ろに転がる、トライアルメモリ。

その視線に気付いたG3-Xが頷くと同時に俺達は2方向へ駆け出した。

俺はトライアルメモリの方へ、G3-Xは自分のバイクの方へと、それぞれの切り札の元へ。

「そこを…どけえ！」

「シュ！」

アンノウンが俺を阻むように盾を構え立ちはだかる…隙を見て、突破するしかない！

「なっ…あんたは、なぜケルベロスの解除パスを知っている!？」

「私は氷川誠、かつて…G3-Xの装着者だったものです、それより速くこれを！」

どうやら、あっちはうまく切り札に辿りつけたようだ、次は俺の番！

「はっ、たああ…！」

盾で蹴りを防がれても、ブレードを手斧で防がれても攻撃の手を緩めない。

一瞬の隙を付いて、突破する事を考えるのみ！

だが、動かずに防ぐだけのアンノウンとひたすらに攻撃をしかけるこちらとでは消耗が違い過ぎた。

「…うっ」

ほんの少し、ブレードを握る手から力が抜ける。隙をつくはずが逆

に隙を見せてしまった。

「シュッ！」

斧を構えるアンノウンの手に今までにない銃撃の嵐が襲いかかった。手斧は弾き飛ばされアンノウンは右手を押さえる。

後ろを振り向くと、G3-Xが両手でガトリング砲をアンノウンに向けて撃ち出し、こちらに頷いている。

「……」

頷き返し、急いでトライアルメモリの方へと向かう。

武器を手ごと撃ち抜かれ、軽くたじろいでいる間に、G3-Xはガトリングに更にアタッチメントを付け足した。

サブマシンガンを2つのパーツに分解し、上下に装着して後部から大型のグレネード弾を取りだし

ガトリングの銃口に装着し、グレネードランチャーへと変わった。

「……ふんっ！」

狙いをアンノウンに定めて、発射…狙いは狂わず真っ直ぐにアンノウンへと向かう。

アンノウンを中心に爆発が起きるが、アンノウンは盾を構え、爆炎と衝撃をどうにか凌いだようだ。

勝ち誇ったようにアンノウンが盾の後ろから顔を突きだす…が

「今だ、行けっ！ 仮面ライダーアクセル！！」

『TRIAL！』

「おお！！」

『ENGINE！ MAXIMUM DRIVE！』

完全に死角である背後から、音声と叫びが響く。

トライアルメモリの力で余分な装甲を排除し、全身を青く輝かせ超高速型アクセルトライアルになった俺だ。

アンノウンが振り向き盾を構える暇を与えずに次々と斬撃を繰り出す。

目にも止まらぬ斬撃はTの字を描きアンノウンへと深く刻み込まれていく。

「…はあ、やつ！　せいっ、たあ！…はああああゝ！！！」

最後に大きく振りかぶった一撃を放ち、左手に握ったトライアルメモリのスイッチを押す。

トライアルメモリに刻まれた数字は…9・7。

『T R I A L ! M A X I M U M D R I V E !』

「9・7秒、それがお前の絶望までのタイムだ」

と、同時にアンノウンは頭上に輪を浮かび上がらせると爆発し…戦いは終わった。

「さて、詳しい話を聞きたい…所だが、まずは2人とも本当に警視庁の人間なのか？」

変身を解き、G3-Xのマスクだけを外した芦河と氷川の3人で話をした。

G3-X、そして、アンノウンの事を2人から聞いたが…2人には面識がないらしい。

「何度も言うが、G3-Xの装着員に君の名はないはずだが？」

「…そ、そんな…それにしても風都…聞いた事がない地名ですね」

芦河と氷川が首を傾げる。2人の警察手帳を見せてもらったが偽造ではなく本物のようだ。

どうしたものかと考え込んでいると左から電話が入った。

『照井、こっちは片付いたが…そっちはどうだ？』

「こっちも今終わった所だ…左、アンノウンと言う言葉に聞き覚えはないか？ フィリップにも聞いてくれ」

フィリップならば詳しい情報を知っているかもしれない。

『ちょっと待ってくれ…』

しばらくして電話の向こうで複数の人間の驚いた声がした、なんだ、向こうは大人数か？

『照井竜…確かに君が戦ったのはアンノウンだったのかい？』

「ああ、G3-Xとか言う仮面ライダーと変な刑事が現れて…共闘してやっと倒せた強敵だったか？」

何か知ってるようだな…フィリップの息を飲む音が聞こえた。

『そのG3-Xの装着者と…変な刑事の名前は？』

「G3-Xの装着者は芦河ショウイチ、もう1人の刑事は氷川誠だ」

『な、なんだって…照井竜、今すぐに事務所に来てくれ、今すぐにだ！…あっ』

話の途中で電話を誰かに取られたようだ、すぐに聞き慣れない声でした。

『おい、俺の名は門矢士…そこにいる芦河シヨウイチを出してくれ』

「……………芦河刑事、門矢という奴から電話だ」

「…なに、門矢士か!？」

少し抵抗感を覚えたが、芦河刑事の知り合いならば話が通じやすい
と思い電話を代わる。

「門矢か…お前がいるって言う事は、また…何!?!…分かった、信
じられないが…すぐに向かう」

電話はそこで切れて、芦河は俺に携帯を返した。

「…氷川刑事、どうやら俺達2人はそれぞれ別の世界からこの風都
に飛ばされたようだ…」

「何!?!」

「ほ、本当ですか!?!」

俺と氷川の目が見開かれる、どんな事情があるのかと思えば別の世
界から来た…と言う突拍子もない…

いや、待てよ…確か、仮面ライダーディケイドという様々な世界を
廻るライダーの話をされた事が…

そのディケイドは…門矢士! さっき電話に出た男か!

「なるほど、どうやら話は繋がって来たようだ…一先ず、探偵事務
…っ!?!」

その時、圧倒的なプレッシャーを感じた俺は即座に構えて辺りを見
渡した。

2人も同様のようで、銃を構え警戒している。

「……ここにもいたか、人の道より外れし、神に逆らう存在…アギトよ」

これまで感じた事のない恐怖を纏った、青い死神が現れた。

続く

第5話 Aの邂逅／3人の刑事（後書き）

カガヤ

「ふう…書けた！」

ゼオン

「やはり2作というのは無謀だったのではないか？」

カガヤ

「んなこたあゝない！（タ◎リ風）…これからますます増えるライダー達…一応昭和組は出ません。多すぎて（汗）」

ゼオン

「サブライダーは少しずつ出るのだな…」

カガヤ

「まあね…ではでは、感想待ってまーっす！」

第6話 Aの邂逅／エル、襲来（前書き）

久々に投稿します！

戦闘中の掛け声とかが不安…アギトって戦闘中はほぼ会話ないです
からねえ（苦笑）

第6話 Aの邂逅／エル、襲来

Side 芦河

さっきまで青空だった空が灰色の雲に覆われてしまった。

その怪物を見ただけで恐怖心が体中を駆け巡った。

なんだこいつは…アンノウンと言う事はアギトの本能でわかる。

アギトの力に目覚めて職場に復帰してから、未確認生命体…グロンギやアンノウンとは何度も戦っている。

それなりの修羅場もくぐりぬけてきた…だが、こいつはなんだ？

以前ディケイド達と倒したあのアンノウンよりも更に強い、戦わなくてもわかる。

「あいつに見覚えはないか？」

隣で冷や汗を流している照井が俺と氷川に尋ねてきた。

だが、俺には全く見覚えがない。

「私の世界で…数回戦った事があります。アギトという戦士数人でどうか倒せた…強敵です」

アギトがいない、今の状況ではかなり厳しいですね」

氷川の世界のアンノウンらしいが…アギトか。

アンノウンやG3-Xの事を知っている時点で予想は出来たがやはり氷川の世界にもアギトはいるようだ、ならば…

「…八代すまない。どうやら…アレで戦うしかないようだ」

ここにはいない八代に心の中で謝り、G3-Xを脱ぎアンダースー

ツのみになる。

「一体、何を!？」

「……まさか、芦河さん」

自分の身を守るアーマーを脱いだ事に照井は驚いているが、氷川は何か気付いたようだ。

「アギトは…ここにいるぞ、アンノウン!!」

左腰で両手を交差させ、右手を素早く前に出し右腰に構えアギトのベルトを浮かび上がらせる。そして、右手を半開きでゆっくりと突き出す。

横では照井もベルトとガイアメモリ、だったな。メモリを取りだし、構えた。

「変身」

「変…身!」

掛け声と共にベルトの両端のスイッチを押すと、俺の体は仮面ライダーアギトへと変身した。

「その姿は…」

「やっぱり、あなたも!」

「…アギト」

氷川とアクセルとなった照井が俺の姿を見て驚きの声を上げる。アンノウンも俺の姿を見てアギトと叫び、長斧を突き出してきた。

「危ない…避ける!」

「っ!？」

以前にも同じような攻撃を喰らった事がある俺は、照井に声をかけ、氷川を抱えて横へと跳ぶ。

直後、俺達のいた場所の空中に紋章が現れ、地上に落ちると同時に爆発を起こした。

「くそっ！」

巨大なブレードを構えアクセルがアンノウンへ向け駆け出した。氷川をガードチェイサーの影に残し、一足遅れて俺も駆けだす。

アクセルが右からブレードで斬りかかれれば、左から俺がパンチやキックで攻撃する。

アンノウンは長斧でブレードを受け止め、柄の根元で俺のキックを弾く。

『ENGINE!』

『ELECTRIC!』

「ふっ」

アクセルがブレードにメモリを差し込み、電撃を纏った剣でアンノウンの長斧を弾き飛ばした。

同時に俺はベルトの右のスイッチのみを押し、更なる姿に変身した。右腕と胸を赤くし、右肩が大きく吊り上がった姿になり、ベルトの中央から赤い剣を取りだす。

スーパーショッカーの戦いの後で覚醒したアギトの新しい姿の1つだ。

この姿になると感覚が鋭くなり、力も増加し炎の力が使えるようになる、この姿ならば!

「てやあ!」「おお!」

雷と炎、2つの剣が同時に斬りかかるがなんとアンノウンは両手で剣を掴み受け止めてしまった。

「…何っ!?!」

「ふんっ!」

掴んだまま俺達を放り投げ、そのまま両手を俺達に向け、再度空中に紋章を浮かび上がらせた。

「神に逆らう愚かな者どもよ…消えよっ!」

投げられたまま体勢を立て直せない俺達は、紋章の爆発に吹き飛ばされる。

「うわあああゝ!!!」

「ああああゝ!!!」

「照井さん! 芦河さん!!!」

全身から煙を出しながら転げまわる、思った以上にダメージが大きい。

やはりディケイドと共に戦ったアイツよりも数段強い…アギトでも勝てないのか。

ブオオオーン、ブルルーン!

その時、2台のバイク音が聞こえてきた。アンノウンが、音がした後ろを振り返ると同時に

2台のバイクがアンノウンを撥ね飛ばし、そのまま俺達の目の前に停止した。

しかも、バイクに乗った2人はメットを外すと人のよさそうな顔をした方は俺を見て驚き
少し、きつめの顔した男は向こうで起き上がりとしているアンノウンと俺を交互に見てきた。

「まさか：アギト？」

「アンノウンの気配がしたから来てみれば、津上以外のアギト、か」
アギト、その言葉を聞いて不思議と2人が自分と同類と感じた、なぜかは分からないが。

「津上^{つがみ}さん！ 葦原^{あしはら}さん！？：どうして2人がここに？」

「氷川さん：氷川さんじゃないですか！」

どうやらこの2人は敵ではなく氷川の知り合いらしい。

駆け寄ってくる氷川に手を出し、その場から動くなと合図を送る。

「誰がか知らないが：その様子だと一般人、じゃなさそうだな」

「はい、俺と葦原さんはアギトです！：あなたは新しいG5とかの人ですか？」

「この状況で呑気な奴だな：」

照井の言葉に津上は満面の笑みを浮かべて、あっけなく自分の正体を話した。

隣にいる葦原は呆れた声を上げるがすぐに真剣な表情に代わり

「おい、津上：久々だから変身を忘れた、なんて事はないよな？」

「大丈夫！ 葦原さんこそ無茶しないでくださいよ。俺達の中で一番無茶するの葦原さんなんですから」

「……ふっ」

そう言いながらも2人は真剣な顔のまま、津上は俺と全く同じ構えで同じベルトを浮かび上がらせ

葦原は両手を顔の前で、爪を立てるように開いた指で交差させ…

「「変身！」」

津上は俺と同じアギトの姿に、そして、葦原は……あれは、ギルスなのか？

ギルス、アギトになれそなった姿として俺も一時期ギルスの姿になっていたが、姿が若干違う？

「アギト…ギルス…存在してはならないものども、今ここで、滅ぶがいい！」

やはり葦原のはギルスだったか、だが俺と違って暴走している感じではない、使いこなしている風だ。

「はっ！」

「アウ！」

気合の入った声と野生のような声と共に2人のライダーがアンノウンへと迫る。

俺もいつまでも地面に倒れ込んでいる場合じゃない！

「アクセル…動けるか？」

「俺に、質問をするな！ うおおおお〜！」

そう言ってアクセルはブレードを杖代わりにして立ちあがり掛け声と共に駆け出した。

「その意気だ！」

俺はベルトの左スイッチを押し、先ほどとは逆に左肩が吊り上がり、左腕と腹部が青くなる。

覚醒したアギトの3つめの姿だ。この姿になれば俊敏性が上がり、風の力が使えるようになる。

左手をベルトにかざし、青い薙刀を取りだし、攻防を繰り広げるアキセル達に加わった。

「はっ、たっ！」

津上が変身したアギトが、アンノウンに数発パンチを決め、蹴りを腹へと繰り出し

「ワウっ！」

ギルスが右から両前腕部にある巨大な鉤爪で胸元を狙い

「ふんっ！」

アキセルがアンノウンの背後に回りこみ、ブレードで斬り付け

「ふっ！」

俺は左から風を纏った薙刀の横薙ぎでアンノウンの首を狙ったが

「愚かな…」

長斧を振り回し、俺達全員を吹き飛ばした。

ただ振り回しただけじゃない、何か圧力的な力を受けたようだ。そして、追撃とばかりに振われた長斧が次々と俺達の体を傷つけて行く。

動きを少しでも止める為に放ったギルスの鞭も斧で斬られてしまい。津上のアギトが俺と同じく赤い姿になり、俺と左右同時にせめても、腕と斧で弾かれる。

『TRIAL!』

起死回生と先程のようにアクセルが青い軽装姿になり、アンノウンに蹴りを入れても

「何っ!？」

「いくら速くても、止めてしまえばどうという事はない」

なんとあの超高速の蹴りを掴み、そのままアクセルを振り回し俺達の方へと投げ飛ばしてきた。

受け止めるのに精一杯で崩れ落ちた俺の眼の前には自分の方へと落ちてくる紋章が見えた。

「津上さん、葦原さん、照井さん、芦河さん!」

「ぐああああ!」

「ガアアア……ウガアアア!」

辺り一面に電撃と爆発が巻き起こる中、ギルスが雄叫びをあげ、アンノウンへと突き進んだ。

一歩一歩走るその足から、手から、肩から見る見るうちに鉤爪が生え、姿が変わった。

俺が最初に変身したギルスの姿へと。

「ガウッ！」

先ほどよりも力強い攻撃でアンノウンを攻め立てるギルス。ダメージが濃く、元の赤い姿に戻ったアクセルに肩を貸す間に津上のアギトも走り出した。

両手を交差するように突き出したあの構えは、まさか俺の4番目の姿になる構えに似ていた。

そう思ったが、次の光景に俺の予想は大きく外れた。

「はぁ…ふんっ！」

俺の方からは見えなかったこの時、津上のベルトは形状に変化が出ていたようだ。

そのベルトの左右のスイッチを押すと、アギトの姿は俺の想像を超える姿になっていた。

全身がまるで溶岩のような形状になり、角も必殺キックを放つ時にしか引かない部分が常に開いている。

「はっ！」

ギルスの攻撃をかわし、カウンターで突き飛ばしたアンノウンの無防備な腹にパンチが突き刺さる。

「むうう？」

それでも僅かによろけただけでアンノウンにダメージはなさそうだ。2人の姿に驚き固まっている俺の腕をアクセルが掴み。

「俺に…構わうな…」

「すまない…！」

苦しそうなアクセルの声を背に受け、俺も持てる力の全てを引き出す。

津上と似たポーズを取り、ベルトの両端のスイッチを押す。

右腕は赤くなり、左腕は青くなる、ベルトからは炎の剣と風の薙刀を取りだす。

炎と風、その2つを同時に使えるようになる俺のアギト、4番目にして最強の姿。

津上の今の姿よりは恐らく弱いのかもしいないが…それでも。

「はっ！」

高く跳び上がり左手の薙刀をアンノウンへ向けて突き出す。

その攻撃はかわされたが、着地してすぐに右手の剣で薙ぎ払う。

それすらも斧で防がれたが、斧との間に割り込むようなギルスの蹴りがアンノウンの顔面を捉えた。

「これで、どうだ」

力が弱まったアンノウンを肩で突き飛ばし、左右同時に斬り降ろす。本体には届かなかったが俺の狙いは長斧だ、見事に斧を持つ手に当たった。

流石に応えたのか、アンノウンは衝撃で長斧を落とし、すかさずギルスが触手を伸ばし遠くへ投げる。

「…貴様ら！」

更にアンノウンの後ろでは、津上が赤く燃え盛り、裂け目からは炎が噴き出している右手を引いていた。

「よしっ」

右手の刀のつばが開き、左手の薙刀と同時にアンノウンの腹部に突き出した。

「ごはっ!?!」

「はあああゝたああ!」

吹き飛ばされるアンノウンの背中に津上の燃え盛る拳が文字通り突き刺さった。

「やったか!?!」

体勢を立て直し立ちあがったアクセルの言う通り、これで決まったと俺は思った。

だが、津上とギルスは違うようだ、2人共アンノウンから距離を取り構えを解いていない。

「ワアアウ!」

ギルスが一際大声でほえると同時に両手を構え、高く跳び上がった。踵から生えた鉤爪で相手を突き刺す、俺もあの姿の時に使った技だ。

「……まだ、だ!!!」

アンノウンはギルスの踵が突き刺さるより速く上空へと跳び上がった。

「…飛んだ!?! 奴は飛べるのか!」

『ENGINE!』
『JET!』

アクセルがガイアメモリをブレードに入れ、光弾を打ち出す。
ギルスも背中 of 触手を伸ばし、アンノウンを捕えようとするが素早い動きで全てかわしてしまう。

「そうだ、G3-Xのケルベロスなら!」

そう思った俺はガードチェイサーの方へ向かおうとしたが、その時。

ドガガガッ! 鋭い銃撃音が聞こえ、アンノウンの無防備な背中を銃撃が襲っていた。

「氷川さん!」

津上が驚いた声を出し、その方向を見ると…

「なんて無茶をするんだ!」

両手にG3-Xのアーマーを付けて、樹の幹によしかかりるように座り込み空中のアンノウンへ向けて

ケルベロスを撃ち続ける氷川の姿が目に入った。

本来全身にG3-Xのアーマーを付けて初めて扱える代物なのだ。

アンダースーツなしでも比較的簡単に付けれる両腕のみのアーマーと樹の幹で反動を抑えるつもりだが

それくらいでは反動は全く軽減しない!

「長年G3-Xの為に体…鍛えて、ますから……それよりも早く奴を!」

氷川の悲鳴に近い叫びで上空のアンノウンを見ると、こちらに落下してきていた。

「今度こそ…振り切るぜ！」

『ENGINE! MAXIMUM DRIVE!』

アクセルのブレードからA字型のエネルギーが放射されアンノウンを貫く。

「ウワアアウツ！」

ギルスは落下するアンノウンを、背中の触手で今度こそ捕え、高く跳び上がり一回転すると両足で踵落としを決め、そのままアンノウンを俺と津上の方へ投げ飛ばしてきた。

「行くぞ、津上！」

「はいっ！」

津上がベルトからS字型の物体を取りだすと、刃が展開し青の薙刀よりも更に大きい薙刀へと変わった。

そして、握った右手に再度炎が噴き出し、薙刀へと吸い込まれていた。

俺も全身に力を籠め頭部の角が左右に展開し、両手の武器に更に力がみなぎって来た。

「「はあああ…はあああ!!」」

津上が拳を突き出したように薙刀を、俺は両手の武器を同時に飛んできたアンノウンへと突き刺した。

「バ…か……なっ…」

アンノウンの頭上に光の輪が現れ、次の瞬間大爆発を起こした。爆発が晴れると、変身を解除した照井や葦原が集まって来た。

俺と津上も同時に変身を解き、互いに向き合う。

「いやあゝ俺達以外のアギトがここにもいたなんて、俺感動しちゃいましたよ…ああゝ氷川さん！」

無言の俺達。すぐに津上は笑顔になり手を差し出してきたが、俺が反応する前に氷川の元へと駆け寄った。

「大丈夫ですか、氷川さん！…もう、無茶しないでくださいよ。前だって似たような事したじゃないですか！」

「あ、あははっ…き、鍛えてますから…大丈夫、いっててっ」

氷川は笑顔で立ちあがったが、すぐに両腕を抱え込みうずくまってしまった。

「津上の言う通りだ、自分の出来る事を考えてしろ……今回は、助かったがな」

ぶっきらぼうに言う葦原に津上と氷川は笑い合った。

どうやら彼はいつもこんな調子で表面上はきつく当たるらしい。

「対面中にすまないが、この2人も氷川の世界の仮面ライダー、らしいな」

「仮面：ライダー？」

「なんだそれは」

照井の言葉に首をかしげる2人。

仮面ライダー、その言葉は俺も門矢士に聞くまでは知らない言葉だった。

この2人も照井も、そして氷川も仮面ライダー：

俺と同じ姿をしながら更に強い姿に変わる津上。

そして、俺のように変身の反動もなく、暴走もせず制御するギルスの力を持った葦原。

なぜかこの2人には親近感が湧いてくる。

ただ同じアギトの力を持つ者とは違う、何かを俺は感じた。

S i d e o u t

・
・
・
・

とある財団Xの研究所にて

そこでは、仮面ライダーデュアルを名乗り帰還したばかりの女エージェントが

部下らしき大勢の人間に指示を出していた。

「あの子の行方は掴めたの！？」

「申し訳ありません、所長！：まだ風都のどこかにいる、としか：体の方は大丈夫なのですか？」

「私の体は大丈夫よ、ただの調整不足なんだから：それよりも、こう言う時の為の発信機は！？」

部下への叱責に別の者が即座に反応した。

「それが、実験の副作用で発生したフィールドが原因なのは詳しく反応しません」

「早く見付けなさい！」

「…そうかっかするのはよくないよ、そのだりお園田理緒所長？」

部屋にいた全員が、声を聞いた途端に口を閉ざした。

園田と呼ばれた女エージェントも黙ってしまった。

「わざわざフルネームに所長を付ける必要はない、と言ってるはずよ？
せんざき仙崎くん？」

仙崎と呼ばれた青年はゆっくりと暗がりの中から室内へと入って来た。

園田と同じく全身真っ白のスーツを来ているが襟と肩には何かの模様が刻まれている。

「ははっ…お気に入りの子がいなくなってご機嫌斜めだねえ」
♪

そして、財団X関係のエージェントは皆無表情だが、彼は園田と同じく表情が豊かだ。

「…それで、何の用なの？」

「いや、何…僕の方は調整が終わったからね…腕試しを兼ねて探してきてあげるよ」

「いらないお世話よ！ デュアルドライバーだって最終調整くらいすぐに！」

「いいのかなあ？ あの子が来人、いやフィリップと接触しても？」

「くっ…」

フィリップの名前が出た途端に園田の表情が痛々しくなる。

その反応が楽しいのか仙崎はさらに続けた。

「僕の情報だと、もう仮面ライダー数人に保護されたみたいだからさー心配なんだよねー」

「…本当なの！？」

仙崎は自分よりも多くの情報を知っている事に驚いたが、すぐに心配そうな声を上げる。

「ああ、本当さ、だから僕が連れ戻してくるよ…この、仮面ライダーデューバーの力でね」

仙崎が懷から取り出したのは、色は黒いがデイクイドドライバーと同じ形をしたバックルだった。

そして、仙崎は研究所後にした。最後に一言を残して…

「それじゃ行ってくるよー愛息子は僕に…って息子って呼んでよかったっけ？ あはははははは」

「ぐっ…ううう…来斗^{らいと}」

去り際に仙崎が残した一言で、園田の表情が更に暗く悲しみに染まった。

続く

第6話 Aの邂逅／エル、襲来（後書き）

カガヤ

「久々に投稿！…活動報告にも書きましたが、遅くなり申し訳ありませんでした！」

ゼオン

「どうしたんだ？」

カガヤ

「以前東北に数年いたので今回の東日本震災で連絡とれない知り合いいて…少し気分が（汗）」

ゼオン

「リアルでも多忙だったからな…」

カガヤ

「でも全員連絡着きました！…少し涙が出るほど喜びましたよ」

ゼオン

「ならばこれからは執筆にがんばるのだな？」

カガヤ

「なのは異伝も早めに更新しますよ！…では、また次回！」

第7話 デンジャラスR／鬼、剣、そして…（前書き）

待ってる人いないと思いますが…久々に投稿！

第7話 デンジャラスR／鬼、剣、そして…

S i d e 悠也

『風都郊外にて水のエルとアクセル、アギト、G3-X、ギルスが交戦した…最もアギトは2人だが』

仮面ライダーWのいる探偵事務所へとバイクを走らせながらアークのゼオンからの報告を聞く。

この世界にきた当初は何も探知出来ずに広域でスキャンをかけるだけだったが

今は違う。異世界のライダーや怪人達の位置をほぼ正確に把握できるようになった。

それにしても…ゼオンはアークにいる時と世界に来た時で、口調が変わるのは癖だろうか？

『津上翔一と葦河シヨウイチか…と言う事はギルスとG3-Xは』

『お前の予想通り、原典だ』

『大体財団Xのやろうとしてる事が読めてきたな、目的まではわからないけど』

俺の予測が正しければ…早くライダーを集めなければ、奴らに殺される前に！

『風都タワーに反応だ…複数のライダーがいるようだ。Wやディケイド達もそっちに向かった』

『風都タワー？』

その時、突然爆発音が聞こえ、風車が付いた大きなタワーから煙が立ち上っているのが見えた。

「なんだ、今の爆発は？」

全員がバイクを止め、爆発のあった方向を見た。

「何の爆発かは分からないが…あまりいい予感はないな」

「同感だ」

「行ってみよう！」

天道と乾の言葉に、野上が続き全員が頷く。

『ゼオン、風都タワーにはどのライダーがいる？』

『全員原典のライダーだ…響鬼に剣、それにもう2人いるが…』

『…いるが？』

『少々特殊なようだ…そのライダーの名前は、仮面ライダー龍騎とナイトだ』

S i d e o u t

S i d e 門矢 士

俺の名は門矢^{かどや}士^{つかさ}通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ。

って誰に言ってるんだ俺は…ま、それはともかく今俺達は風都タワーに向かっている。

W達と合流し探偵事務所にたどり着くと同時に

『風都タワーにバケネコや怪物が沢山出て、被害がかなり出ている

らしい。すぐに向かってくれ
俺達もすぐに向かう!』

かなり強いアンノウンを倒した、照井竜という仮面ライダーアクセ
ルから電話が来て
俺達はすぐに現場に向かった。今は光 夏海こと、夏ミカンを後ろ
に乗せて走っている最中だ。

「それにしても、この街って物騒ですよねこんなにあちこちに怪物
が出るなんて」

「ええ、僕の住んでいた街も結構物騒でしたけど、ここまでは…」

前をそれぞれのバイクで走りながら話をしている五代雄介と紅渡を
見る。

2人共俺の知っている仮面ライダークウガ、キバに変身するが
どちらも俺の知るクウガやキバより実力は段違いだ。

「なるたき鳴滝さんが言っていた『今までにない世界の危機』、こう言う事
だったのでしょうか」

「さあな、あいつの言う事なんて信用できないぞ?」

「海東さんが何か情報収集で掴んでくれればいいけどな」

「そうだな…」

隣を走る俺の知るクウガである、ユウスケが話しかけてきた。

そして、俺はこの世界に來た時の様子を思い出した。

・

「これは…大きな風車? それに…」

いつものように写真館のタペストリーに描かれた絵の世界に移動し

てきた俺達だったが：

「なんでしょう？ 周りが歪んでいませんか？」

夏ミカンの言う通り、巨大な風車とその周りがぐにやぐにやに歪んだような絵が描かれている。

「なんだかこの歪み方気味が悪いわね…」

小さな白い蝙蝠のキバーラも絵の周りをパタパタ飛んで顔(?)をしかめた。

「この風車は、風都タワーだね」

「知ってるんですか、海東さん」

ユウスケの問いに、怪盗ライダーである海東^{かいとう}大樹^{だいき}は頷いて説明を続けた。

「2人で1人の探偵で仮面ライダーWがいる世界さ。でも、この歪みは一体なんだろうね」

海東にもこの歪みの意味は分からないようだ。

「それは…世界の危機を現している」

「お前は、鳴滝！」

俺達が振り向くといつの間にか、黄土色の眼鏡とコート、フェルト帽を着た鳴滝が立っていた。

こいつは毎回様々な世界で俺を殺そうと色々な刺客を送ってくる、宿敵とも言える男。

「面白い、今回は最初っからクライマックスって所か？ いいぜ、ケリをつけてやる！」

俺は懷からデイクイドドライバー、ユウスケも腰に手を当てクウガのベルトを出現させた。

「いや、今回は違う。そのような場合ではないからな……」

「なんだ、大ショッカーがハイパーショッカーにでも名前変えて世界を破滅させようとしているのか？」

冗談半分で言った俺の言葉に鳴滝は笑いもせずに、ただ真剣な顔で頷いた。

「財団X、Wの世界で圧倒的な力を持った巨大企業組織……それが世界の力を手に入れようとしている」

「財団X？ 世界の力？」

「詳しい話は私にもよくわからない。だが、君の……いや、仮面ライダー達の力が必要だ」

鳴滝は俺だけでなく、ユウスケや海東にも目を向けた。

「既にこの世界にはいくつもの世界のライダー達が集められている。これからも増えるだろう」

「何っ、まさかカズマ達か？」

「ワタルもこの世界に？」

「……少年君も……」

皆それぞれ親しいライダー達の顔を思い浮かべるが、鳴滝は静かに首を振った。

「いや、彼らだけじゃない。むしろ重要なのは彼らではない：『原典のライダー』達だ」

「原典の…ライダー？」

「そうだ、それぞれ真の仮面ライダークウガ、真の仮面ライダーアギトと言える存在」

「真の仮面ライダークウガ：俺以外のクウガって事ですか！？」

真のクウガという言葉に、ユウスケがすかさず反応した。

自分以外にクウガがいると言うのがショックなのだろう、が、俺は別にショックではなかった。

元々仮面ライダーは多種多様、同じ名を持っていても全く別のライダーがいる事くらい分かっていたからだ。

「クウガやアギトは世界の数だけ存在する：女のクウガ、子供のアギトなど多種多様にだ

しかし、原典のライダーは違う。彼らは他のライダーとは一線を化している。

ディケイド、君がスーパーショッカーとの戦いで共闘した仮面ライダーWもその中の1人

そのWはこの世界にいるWだが、他にも…すぐ外で戦っているキバも…その中の1人だ」

すると、外が騒がしくなり、何か戦いの音が聞こえてきた。

「士、今の音は！？」

「ああ…どうやら戦いはすでに始まっているようだ」

「今外で戦っている仮面ライダーキバは君達の知っているワタルではない者だ。では…頼んだぞ」

「あ、おい。まて！」

鳴滝はそう言うといつものように銀色のカーテンと共に消えて行った。

「後の話は『世界の守護神』から聞くといい、すぐに向こうから君に会いに来るだろう、ディケイド：」

意味深なセリフと共に：

「世界の：守護神？」

「そんな事より士、今は早く外に！」

「そうだな、行くぞ！……って海東はどこだ？」

今写真館にいるのは俺、ユウスケ、キバーラ、夏ミカン

「おや、お客さんいたと思ったけど帰っちゃったのかい？」

「お、おじいちゃん：」

そして、台所からお茶を持ってきた夏ミカンのじいさんだけだ。

「泥棒さんなら置手紙残して行っちゃったわよ？」

キバーラが小さなカードを口にくわえて運んできた。

そのカードには確かに海東の字で

『士、僕は宝探しとついでに情報収集をしてくるから、化け物はよろしく☆』

と、書かれていた。

「何がよろしく☆だ、しかも宝探しがメインかよ、あのコソ泥めえ
〜!!」

「ま、まあまあ…海東さんはいつもの事じゃないですか…」

「そうだぞ、士…諦めて俺達だけでも行くぞ」

「はあ…というわけだ、爺さん。ちよつと出かけてくる」

「なんだか分からないけど、みんな気を付けてね」

爺さんの声援(?)を聞きながら外へ出た俺達の眼に映ったのは…

「な、なんだこりゃ〜!?!」

「ファンガイアに…あれは、グロンギですか!?!」

「うーん、オルフェノクもいるみたいねえ」

「どうなっていやがるんだ…まるで…」

至る所に怪物がいて、街や人を破壊していた。

ファンガイア、オルフェノク、イマジンなど多種多様な世界の怪人・
怪物達。

以前夏海の世界で見た光景…俺が初めてディケイドになった時のよ
うだ。

「あ、士! あそこにキバがいる!」

ユウスケの指さす方には、確かに深紅の蝙蝠をモチーフにした仮面
ライダーキバが戦っていた。

ワタルよりも戦い慣れしているようで、周りを怪物に囲まれてもな
んなくいないしていた。

だが、あの数では時間の問題だろう…

「本当です! 早く私達も!…キバーラ!」

「あのキバ、なんかお兄ちゃんとは違うような気がするけど…まあ

いいわ、行くわよ夏海ちゃん♪」

「なんだか分からないけど、とにかく…やるか！」

「ああ、これ以上あいつらを暴れさせはしない！」

「「「変身！」」」

『KAMEN RIDE DECADE』

俺達はそれぞれの変身ポーズをとり3人の仮面ライダー

ディケイド、クウガ、キバラーへと変身し、怪物達へと斬り込んでいった。

・

その後、俺達はどうにか怪物達を倒して、キバと合流。

驚いたのが、キバが変身を解くとそこには、俺を旅へと導いたあの紅渡がいた事だ。

いや、正確にはあの紅渡とは少し違っていたが…向こうは俺達の事を知らないで驚いていたし

キバラーとキバットも互いを見て驚いていたが、どうやら別の世界の兄妹のようだ。

（あの紅渡と同姓同名で、しかも同じ姿や口調をしていても違う存在…）

「やっぱり、あの紅さんとは別人…ですよね？」

夏ミカンは、あの紅渡と話した事がある…違和感に気付いたのだから。

「多分な、それもこれから会えるという『世界の守護神』が教えてくれるだろうぜ」

「なんだか、胡散臭いけどな、守護神だなんて」

「そうですよね、なんか…大げさというか」

ユウスケも夏ミカンもあまり信じていないようだったが

「世界の破壊者がいるんだ。守護神がいたっておかしくないだろ」

「それは…士くんは破壊者じゃありません！ 私達の大切な仲間です！」

「夏海ちゃんの言う通りだぞ、士…まだ気にしてたのか？」

「ふっ…」

2人の心からの言葉に笑みがこぼれる。

かつての俺は破壊者としての宿命を受け入れ、文字通り破壊の限りを尽くしてきた。

でも、今の俺は…違う。

それを気付かせてくれたこいつらに、絶対に表に出さないように改めて心の中で礼を言った。

「あ、士君が照れました♪」

「うんうん、士は素直じゃないけど、分かりやすからなあ」

「う、うるさい！ 余計な事言ってるど振り落とすぞ夏ミカン！」

「キャッ！ 揺らさないください！ 笑いの…」

「ちよっ、夏海ちゃん、今それやるとホントに危ないから！」

「あっ！？…少し、刺さりました」

「あっ…あはははっ…って夏ミカン…！！！」

これから戦場に向かうと言うのに、わいわいと賑やかに騒ぐ後方を見て、紅と五代は

「なんだか、緊張感のない人達ですね」

「いいじゃない、ずっと気を貼り過ぎて本番で疲れちゃうよりはさ」

と笑い合い

「相変わらずだな、あいつらも…」

「まあ、それが彼ららしいけどね」

「ってかフィリップ：お前、亜樹子と一緒に留守番してた方がよかったんじゃないか？」

「大丈夫だよ、もうすぐフアングも直るし：それになんだか僕が行かなきゃいけない気がするんだ」

「？　　どういう意味だ？」

「分からない、けど：何かが呼んでいる：そんな気がするんだ」

「……よくわからないけど、行けばわかるんだな、相棒」

「ああ、頼むよ、翔太郎」

先導するために一番前を走っていた翔太郎とフィリップがそんな話をしている事など知るよしもなかった。

S i d e o u t

S i d e 城戸真司

俺の名は城戸^{きと}真司^{しんじ}モバイルニュース配信会社「OREジャーナル」の記者だ。

と言っても、つい最近までは記者見習いだったんだけど…

「城戸。何ボーっとしてるんだ？　　おいてくぞ」

「あ、おい、待てよ蓮！」

黒いジャケットに身に包んだぶっきらぼうなコイツは秋山蓮。

特になんてことはない、ただの腐れ縁だ。

ある日とある喫茶店の前で出会って以来、なぜか事ある毎にコイツと出会ってしまい

いつの間にか名前も覚えられてしまった…なんでだ。

とにかく、俺はいつものように取材中に蓮とぼったり会って、なんだかんだで話をしてたら：

「いつの間にか知らない街に飛ばされてたんだよなあ」

「日本、なのは間違いなさそうだな」

ビルの窓に張られたチラシを見ながら蓮が呟く。

そこには『風都』と言う文字が書かれていて、どうやらここは風都という街らしいけど。

「風都なんて街、日本にはないはず…」

「記者のお前が知らないって事は本当にないか、もしくはお前の知識不足か」

「むっ、そういうお前だって知らないじゃない…っ!？」

突然、頭に何か音が響き思わず俺は頭を押さえた。

蓮の方も同じで、頭を押さえずくまっている。

最近、俺と蓮が抱える持病だ。ストレスだとか栄養不足だの、医者には色々言われたが

2人揃って原因は不明。

しかも、この変な街に来る直前もこの頭痛に襲われたような気がする。

それにしても：

「うっ、ぐっ…な、なんか風都に来てからやけにひどくなってないか、この頭痛？」

「あ、ああ…前はただキンキン鳴ってるような感覚だったのが…痛みまでこんなに激しいとは」

しばらく、すると頭痛が少しは収まって来た。

そして、何気なく近くのビルの窓ガラスに目が映り…見た、見てしまった。

「な、なんだ…あれは！」

「…こうもり、と龍…か？」

蓮も見えているようだ、と言う事は幻じゃない…これは現実に見えるんだ

窓ガラスの中にうつすらと…

赤い龍と黒い蝙蝠

こちらをじっと見ている2体のモンスターの姿が…

「お兄ちゃん達大丈夫？」

「どうしたんだ？」

「わああー!!?…あ、あれ？」

「び、びっくりしたあ…いきなり大声を出すんだもんな」

聞き慣れない声にふっと我に返った。

顔を上げると小さな男の子と男性がびっくりした顔でこっちを見ていた。

「あ、ありがとう…もう大丈夫です。ほら、蓮も」

「……大した事はない」

ぶつきらぼうに返す蓮。心配してくれたんだからもっと感謝すればいいのに：

「すみません、コイツ無愛想で」

「あはは、気にしてないさ青年。俺の名はヒビキだ。これも何かの縁だ、よろしくな！」

シュツと指を敬礼のように振り挨拶するこの人はヒビキというらしい、変わった名前だな。

「僕は来斗、よろしくねお兄ちゃん達！」

無邪気な笑顔で挨拶する少年、来斗に俺と蓮は思わず顔を見合わせてしまった。

来斗を見ると何か、大事な事を思い出せそうな気がしたからだ。

その後、ヒビキさんのバイクが止めてある駐車場に、俺と蓮が載っていたバイクを移動させた。

と言うのもどうやらヒビキさんも俺達と同じで、別の場所にいたのがいつの間にか風都に居たらしい。

「そっか、君達も別の場所にいたのか：そして、なんで風都にいるのか分からない、と」

「はい：でも、こんな状況になったのが自分達以外にもいるのはなんか心強いというか」

「でも、結局何も分からないんじゃないか？」

ま、また蓮はこう言う事言う：でも、ヒビキさんは気にも留めていないようで、本当いい人だあ。

「それじゃあ、少年君は、ここで誰かを待っているんだっけ？」
「うん！ 後もう少しで来るよ！」

この男の子、来斗くんはどうやらヒビキさんがこの街に来て出会った少年で

風都の事を色々教えてくれた恩人らしい。

ここで待っている人がいると言う事で、俺達も少し付き合う事にした。

本当はもっと情報を集めたいんだけど、来斗くんからも少し話を聞けるし

何より、少しでもお礼になればと思ったからだ。

蓮は以外にもすんなりと了承してくれた、素直じゃない奴：

「しかし、困ったなあ：イブキ達とも連絡付かないし、ここ本当に日本かなあ」

どうやらヒビキさんは誰か友達に携帯で連絡したみたいだが、不通のようだった。

俺も風都に来て携帯を見たが、なぜか電波がない状態。

周りを見れば普通に携帯で話してる人がいるというのに：故障？

「公衆電話も見当たらないし：あ、そうだ！ 来斗くん、もし携帯を持ってたら貸して：えっ？」

「うっ、ううゝ：うゝ！」

来斗君の携帯を持っていたら借りようと思ったら、来斗君は頭を抱えてしゃがみこんでしまった。

「どうした？」

「来る…来るよ……」

すかさず蓮が来斗君に駆け寄った。

ヒビキさんは…何か怖い顔をして辺りを見渡している。

「来斗君、大丈夫！？…って、ヒビキさんもうかしたんですか？」
「…なんかすごくいや～な感じがするんだよね、青年、その子連れてここから離れた方がいいよ」

さっきまでと打って変わった真剣な言葉に俺は頷くしかなかった

「わ、わかった…来斗君、立てる？ 蓮一先ず病院を探そう！」
「そうだな…来斗は俺が背負って行く、背中に乗せろ」

蓮の背中に来斗君を乗せて病院を探そうとした。

「来るよ…あいつらが、来る！」
「来るって、来斗君が待っていた人かい？」
「違う、違う違う！ 僕はあいつらなんか待ってない、呼んでない
！！」

来斗君が叫んだ、その時だった。

—ピシャー—

突然、風都タワーと俺達の周りにいくつもの雷が落ちてきた。

「な、なんだ！？」
「くっ」

俺と蓮は咄嗟に来斗君を護るように覆いかぶさった。

そして、目を見開いた時に見たのは…自分達に襲いかかってくる異形の怪物達。

「うわああゝ!?!? な、なんだこいつら!?!?」

「とああっ!?!? そいつ!?!?」

もうだめかと思ったその時、どこからか現れた赤紫色の鬼のような怪人が現れ、怪物を殴り飛ばした。

「大丈夫か、青年!?!?」

「そ、その声は…ヒビキさん!?!?」

「なんだ、その姿は…」

その鬼からヒビキさんの声がした…と思ったらその鬼がヒビキさんだった。

蓮もヒビキさんの姿に驚いている。

「あゝ、うん、説明してる暇はなさそうだから、少し隠れててくれないかな?」

ヒビキさんの視線の先にはこちらを狙っている異形の怪物達の姿があった。

「ちっ、こっちだ城戸!」

来斗君を背負った蓮の誘導で近くの建物の陰に隠れた俺達。

それを見たヒビキさんは、こくんと頷き手に2本の棍棒を携え怪物達へと向かって行った。

「こいつら、一体…なんなんだ！？魔化魍まかもうもいるけど、それ以外の変なものもいるし！」

―バキッ、ベキッ

次々と怪物を打ち倒していく、ヒビキさん…

その姿に俺は、何か心に疼くものを感じた。

横を見ると蓮も同じなのか、じっと胸元を押さえている。

「…戦わ、ないの？」

「来斗君！？ もう大丈夫なの？」

「お兄ちゃん達は…戦わないの？」

来斗君は苦しそうだったが、それでも俺達に必死に尋ねてきた

「戦う…って俺達か！？ そりゃ、このまま何もしないのは…悔しいけど」

「………」

蓮も悔しそうに拳を握りしめる。

俺はただの記者だ…何も出来ない。それでも…力がなくても俺は…

「うわああゝ！？」

「ヒビキさん！？」

「まずい、あの数じゃ1人では無理だ！」

いくらヒビキさんが強くてもあの数相手では多勢に無勢だった。

「くそっ！」

「待て、城戸！」

走り出そうとする俺の腕を蓮が掴んだ。

「話せよ、蓮！」

「落ち着け！ 力のない俺達が行ってもあいつの邪魔になるだけだ！」

「くっ、分かってる…分かってる、けど！」

そう、分かり切っていた。俺が行っても足手まといにしかならない。けど…このままじゃヒビキさんが…

「っ！ 来た！ 来たよ！！！」

「？ 一体何が…？」

来斗君が起き上がり叫んだ方向を見ると…

『MACH』

『THUNDER』

「はあああゝ！！！！！」

紫電を纏った青いバイクに乗り、銀と青い甲冑を全身に纏った騎士がすごい速さで

ヒビキさんに襲いかかろうとした怪物達を撥ね飛ばした。

「んっ？ 一体何が？」

「……………」

その騎士はヒビキさんをじっと見つめていたが、バイクから降りるとすっと手を差し出した。

「俺の名は：剣崎一真けんざき かずま：仮面ライダー、ブレイド」

「俺の名はヒビキ、自己紹介してくれるって事は味方と思っているのかな？」

「どうやらあなたは向こうの人達を守って戦ってたみたいだから：で、いいですか？」

「その通り！ しかし、仮面ライダーブレイドとはその姿そのまんまって感じでいい名前だねえ」

ヒビキさんは騎士、仮面ライダーブレイドの手を握り立ちあがり、そのまま握手をした。

2人はすぐに背中を預け合い、周りを囲む怪物達へと向き直った。

「1つ聞くけど、こいつらに見覚えあるかい？」

「いくつも見覚えありますけど：けど、ありえない、詳しい話は後でしますけど：こいつらが：

存在する事があり得ない奴らもいるんです！」

ブレイドが腰に携えた剣を抜き、とある怪物へと向けた。

その怪物はカブトムシのような化け物だった。

「こいつはビートルアンデッド：俺が持っているカードに封印されているアンデッドなんです」

「アンデッド、不死身の怪物か、そいつは何体もいるんじゃないのかい？」

ヒビキさんは襲いかかる怪物の爪を右の棒で防ぎ、すかさずその脇腹に左手の棍棒を突き立てる。

ブレイドもビートルアンデッドと呼ばれた怪物と鏖迫り合いをしていた。

「アンデッドは一種類につき、一体しかないはずなんです！ 俺のこの姿はこいつの力を使って

変身しているんです！ だから、こいつが今ここにいるのはありえない！」

手に持った剣に力を籠め、ビートルアンデッドを押し戻し、剣の連撃で弾き飛ばした。

「なら、こっちも同じさ…こいつらの中にいる化け物に、魔化魍が混じってる」

「魔化魍？」

「ああ、妖怪みたいな物さ。こいつらは音撃という清めの音しか倒せない！」

ブレイドを上空から2体のバケネコが襲いかかって来た。

同時にヒビキさんにも先程、ブレイドに弾き飛ばされたビートルアンデットが剣を振りかざし来る。

「…だったら」

「…こいつは」

「任せた！」

2人がまるで前もって打ち合わせでもしたかのように、背後へと同じ時に向きかえり

ヒビキさんは魔化魍に、ブレイドはアンデッドにそれぞれの武器で攻撃した。

「と言っても、なんだか俺達の知らない怪物がうじゃうじゃ混じってるみたいだな」

「そうです、ね！」

襲いかかってくる全身灰色の怪物を見て、武器を構え直す2人。どうやらあの灰色の怪物は2人には見覚えがないみたいだ。それでも、勇猛果敢に攻めて立てる、そこには迷いも躊躇いもなかった。

「すごい……」

「ああ……」

その光景を俺と蓮はただ黙って見ているしかなかった。見惚れていた、と言ってもいいかもしれない。

俺は、カメラを持っていない事をここまで後悔した事はなかった。愛用のカメラは今、修理中の為、インスタントカメラすら持っていなかったからだ。

「お兄ちゃん達、なんで戦わないの？」

「ら、来斗君……俺達は……その……」

「戦う力があれば……戦うさ、しかし！」

唇をかみしめる俺と、心の底から悔しそうに拳を握る蓮。

2人を心配そうに見上げていた来斗は、すぐに笑顔になり

「大丈夫だよ、お兄ちゃん達にも戦う力……あるもん、ほら！」

「えっ……ええっ！？」

「な、なに！？」

来斗くんが近くの窓ガラスを指さし、何気なく2人でガラスを見るとそこに映っていたのは俺達……ではなく

左手に龍の頭のような籠手を付けた、赤い戦士と

左腰に剣を携えた、黒い戦士の姿が映っていた。

「さあ、お兄ちゃん達…あれに手をかざして」

言われるがままに俺と蓮はガラスに映る2人の戦士に手をかざした。

—キーンキーン

すると、ガラスを爪で引っ掻いたような音が頭に響き

いつの間にか手には黒いデッキのようなものが握らっていて、腰にはベルトが巻かれていた。

「これは…っ!？」

「あ、頭が…!」

この世界に来てたから何度も味わったあの頭痛…だけど、今回は痛み方が違っていた。

まるで、何かを無理やり頭に詰め込まれていくような感覚。

そして、脳裏に浮かぶ様々な映像…

鏡の前に立ち、蓮と2人でポーズをとり、あの赤い戦士と黒い戦士に変身する映像。

鏡の中の世界、ミラーワールドでモンスターと戦う映像。

紫色の戦士や緑色の…仮面ライダーゾルダと戦う映像。

…さて、ミラーワールド？ 仮面ライダー？

「仮面ライダー…龍騎」

「…ナイト！　そうか、思い出したぞ！　戦い方を！」

なぜかは知らないけど、俺と蓮はこのバックルの使い方を『思い出した』

「…久々の変身だ、行くぜ、蓮」

「ふっ、いつものように足手まといになるなよ、城戸？」

なぜかは知らないけど、こんなやりとりをどこかでしていた気がする。

それを思い出した事が嬉しくて、蓮と2人で笑い合った。

次は、頭に浮かんだ映像通りのポーズをとる。

俺は左手に金色の龍が描かれたデッキを持ち、前に突き出し左手を腰に、右手を左斜め前に伸ばす。

蓮は左手に銀色の蝙蝠が描かれたデッキを突き出し、左に腰を捻って、右手を前に持って来る。

「「変身！」」

変身の掛け声と共にカードデッキをバックルに装着する。

と、同時にガラスの中のライダーの姿がそのまま俺達へと重なった。

「っしゅあー！」

「…行くぞ」

自分の姿を確認し、俺達はヒビキさんとブレイドが戦っている場へと突撃した。

「これで…僕の待っていた人、みんな来たね♪」

背後で来斗君が何かを言っていたが、気にも留めずに…

S i d e
o u t

仮面ライダー龍騎、ナイト…復活！

続く

第7話 デンジャラスR／鬼、剣、そして…（後書き）

カガヤ

「いやあ、かかったかかった…3カ月もかかった」

ゼオン

「待ってた人はそういないだろうがな…」

カガヤ

「―（T|T）↓グサツ！…い、いいもんいいもん、それでも俺はかくんだもん！」

ゼオン

「駄々っ子はきもいからやめろ」

カガヤ

「Ⅱ（△□、）⇒グサツ！…こ、これで主要ライダーは全員出ました…リイマジライダーは…まあ、主要なようで主要ではないので」

ゼオン

「主人公、出番ないな」

カガヤ

「まーねー、その世界に行って必ずしも中心人物になるわけじゃないから…そういうスタンスだしこの小説」

ゼオン

「哀れな主人公…か」

カガヤ

「重要な役割あるから出番あるけどねー…そんな主人公や主要ライダ―達は次回大集結予定です！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257q/>

とある男の贖罪の記録

2011年10月6日22時54分発行